FAIRFIELD GIRLS' SCHOOL

SINGAPORE.

EXERCISE BOOK

昭和20年

昭和21年

Name

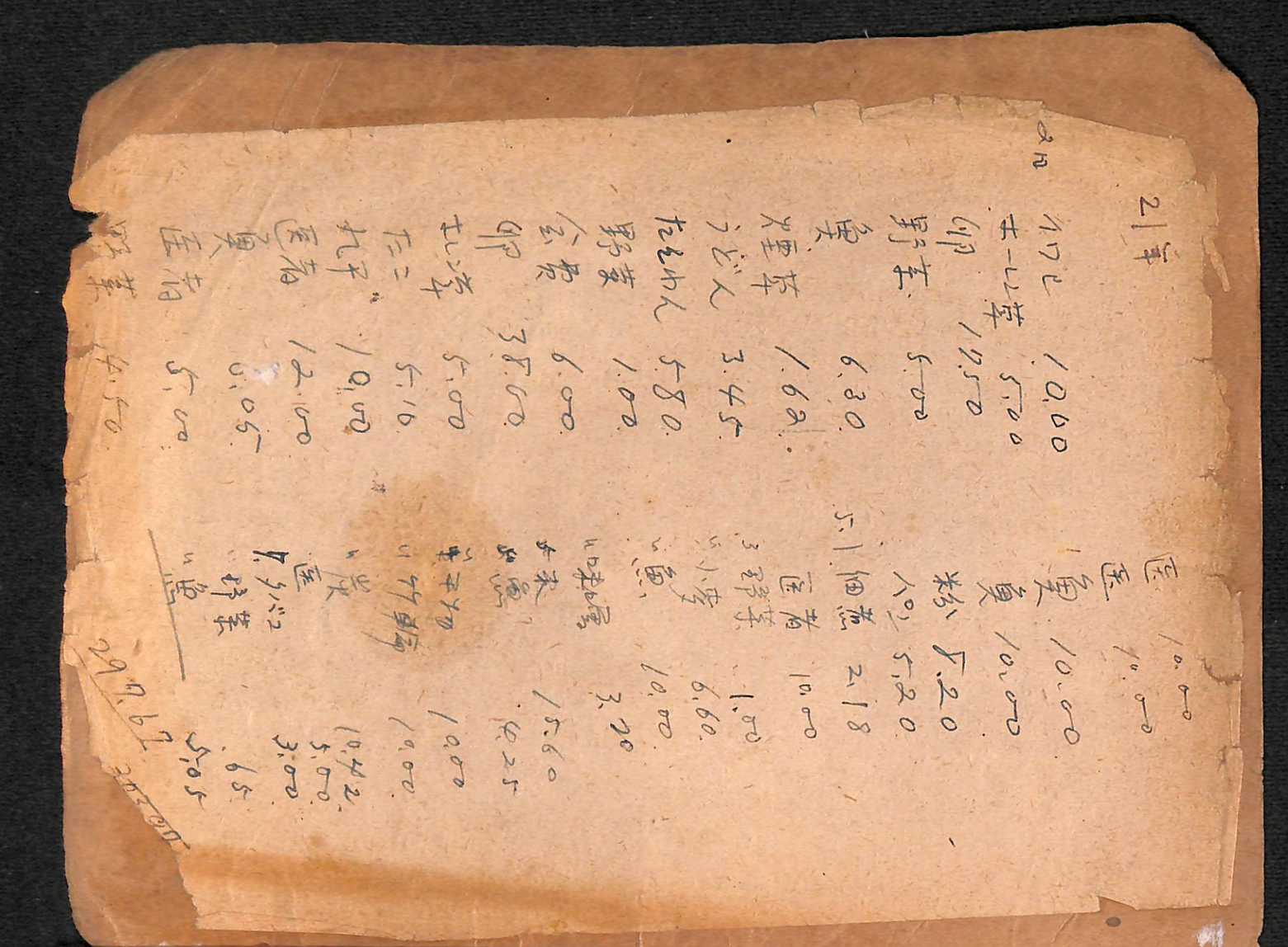
22年

Standard

Subject

Book No. 40

"SINTIT" THE NEW BOOK COMPANY,
Fancy, Educational Supplies, Printers and Stationers
70-172, Cross Street, Singapore.



昭和二十年

一月一日　敵機来襲、小田切部隊（〇・〇）、五〇〇まで来、一四〇〇頃大垣国司来る、林富士馬大村入隊と一八〇〇頃帰る。三合伝覚を受ず。けふ寄りし私の後ろ姿、松下の「南をゆくや」なり。

一月二日　㊐石田正喜、三十名に金快と。第五し

三日　午後門伝合にゆく途中子供にお年玉貰ひやり、「南方地図」買ひ、「南の星」店頭にあり。三合伝覚EIOUU終る。昨日大阪に初空襲すと。

四日　家居、一七〇〇より数防団の会、明日より五日に一度宿直と、中隊整理報告し来る。

五日　㊐坂の安吾、芳野のを私ものせと。一六〇〇銅元社の柴野君来訪、日本新聞会一月号と。夜警防団の当番にて外会に宿直、二二〇〇一枚。

六日　五〇〇一枚、六〇〇宿直を解除、二一〇〇まで眠る。二〇〇〇二枚来。

七日（日）五〇〇一枚。敵B宋島西方に出動と。㊐長沼静人、千葉より信州へ帰郷と。

八日　二一〇〇創元社「中支万里の長城」一冊、「南の星」三十冊を受取る。一三〇〇研究所、午後、石田、鎌田、松沢、益田の諸君に一冊づつ渡す。一五〇〇浦和いせ田代紙問屋人を方々しらべるが、西荻宿（中村、合計三冊渡す、田代一冊渡したのみと。

九日　㊐大垣より。父と大に一冊づつ渡る。一二〇〇本所。一三〇〇午後父と出版会へゆく途神田にて朝鮮三人に二冊とる。小山石彦に一冊をやし、朝日中村に渡す。帰りは古本屋にず一冊売し、桐山ほまを訪ねし清水物産、高野へ疎開と。桐山は古本屋にありて入院中と。（冊なし、あるが中村氏に一冊やる、口惜しと。この夜慰せし。

十日　㊐なし、一三〇〇出所、白倉芳郎に一冊やる。（昼中）柳氏大垣、芳野と、清水

八郎迄、一五、〇〇ロ各所長之ト。此金いよ〳〵悪し、夜家庭に、也一〇〇一枚、

十一日 一〇〇一枚、三〇〇一枚。一二、〇〇出勤。㊐母様、田辺家同、三島秀祝に一冊つゝ。

枚二一、三〇一枚。

十二日 曇一五、三〇〇に一枚つゝ、ましゆ家へ昨日より眠りて知らず。創立記念日三十冊受取る。家鶏三十冊は送りしと。（私氏の誤れしなり）社務所は遅れ出。「南の星」信州の長沼、

右金の山田廉家に一冊つゝ。㊐西川英夫、石田石家。二〇〇に。安吾氏来り書物のこと多く参考書のこと。

十三日 一〇〇出勤、帰途長野を訪ねし。家、森山君を訪ね一冊送す。夜常會。けふ家へ帰りて教育部隊陸軍中野より出発の号令を見、涙出し、春の行き難し。近せり。㊐出張事五。

十四日 (日)朝柏井母帰京。晴気なり。㊐なし、事なし。

十五日 此日、外宮を拝礼し奉ると。一三、〇〇より二十四史。佐藤本安研究所勤務。「南の星」を社使用、和田氏、山久保。長野より電話。近藤氏へ移ると。芳野清子嫁家。翌防団当直。

十六日 当直に翌朝なりしは如何にて也。㊐芳野。一〇、三〇なる久保に翌朝、門仮名に引き出し陸にて出られしとて田浦義夫。留守をゆきしに疎開（無理）と。小野寺氏（外部）アレアの民族と文化」買ふ。後日は長崎なり。

十七日 五、〇〇一枚。九〇〇当番出勤。無事。㊐村上菊一郎、白石芳郎「南の星」の礼。山田廉家、堀口子の二冊。一二、〇〇一枚来。

十八日 (八) 出勤、㊐桑原武夫、長野敏一、渡井石城中尉。寒し。御軍号五十三ロ八〇。

査閲日誌、拡来る。

十九日 京阪に敵戦来と。㊐和田三平三印に一冊。石田君早川、森山家、夜「大鵬」「スマトラにて」を放送く。㊐「書香」来。村田。

二十日 一一、三〇出勤、「大鵬」を務返る。森山夫人乾芋もち来りしと。夜分

㊐宿直。無事

二十一日 (日)㊐和田氏、信州長沼氏、満洲布村一夫。無事、

二十二日 一一、三〇出勤、一四〇。「蝦夷金子銀蛇」買ふ。大学（中之和田久保君の坊やと南

もし、氏出勤の日なれば無事の、三善氏（は明日住家旅近江氏へ疎開と、明日の旅行いやき、往来して帰宅、三善氏「南の星」一冊与ふ。二〇〇一枚

㊐主南部へ来。

二十三日 〇、三〇一枚便へ来、一一、〇〇出勤、佐藤本部に電話せしに門部隊長いまし森本家いちりと。午前中立教大学庭内安倍留治氏参り、話しやく。帰途「唐

詩評注読本」買ふ。㊐父。

二十四日 当番、九〇〇出勤、事なし、ガラスを張り、「神谷報告」と「空襲日記」買ふ。

二十五日 ㊐帰宅又夫。三、三〇より銀座「知恵の会」に中もしに無人、森本家に中もしに門部中

佐、若松中と、そこへ中佐の相撲と、佐藤本二印写真を撮り、写みの、宿泊して会る我の「ゴ那倍勉強」買ふ。夜当直。寒し、(一)出なと。

二十六日 ㊐堀口氏の年賀状、一二、〇〇出勤、俸給袋ふ。一五、〇〇用白いて分「清風俗志」買ふ。二二、〇〇一枚。

二十七日 二、〇〇二枚。一〇、〇〇出勤、一二、三〇空襲警報に帰り、門仮名に空襲警報、一二、〇〇まで八

〇、三〇一枚、〇枚来る。㊐服部、中西度百せしと。三島秀祝、母様鴻一郎芳野。

（一三、〇〇空襲警報に帰り、夜りしに無用、）

午後より後を連れて酒とりに来りし。二、三〇より一枚、来。

二十八日（日）一〇、〇、二、〇、一枚づゝ。午後教室にて「アイヌの住居」「満洲城郭考」「鉄砲伝来記」写す。寒し。三〇、〇、大塚君来訪、保田陽佐吉と。山水樵に落ちしと。二、〇、一枚来。

二十九日、〇、三〇、一枚、二、三〇、一枚、四〇、琴報（八丈島）。一〇、三〇、保田と切ゆしか割合元気、二、三〇、神田いやもし飲（元）社（ゆげ）。

三十日　昨日、駒込千駄木町（蓋し、鴎外の旧宅焼け）焼跡。「清朝末路、秘史」写す。柳元伝女田堂子「南京」なりしと。夜、警防当直。

三十一日　当番出勤、一四〇、〇、〇、所長の講演、鎮田氏不快。昨日「ゆもと」もいて智嬢、不快なり。〇、〇、評論社より「まちを」再版三千と。

二月一日　〇、〇、勤、田父来り。青云し。雪降る。

二日　〇、〇、勤、〇、三〇、一枚、田切好「岳色」、面白らし。午後散髪、一、三〇。寒し。二〇、〇、一枚。

三日　〇、〇、勤、午後保田と買物もちゆく。夜中山氏来訪。堀辰雄氏、佐藤田鶴の事ありと。田水田鶴子より手紙。

四日（日）寒し。午後堀氏のを訪れんか藤俊策君と訪れし、大したことなし、蛙井氏より佐藤氏分いりと。

五日　田大、脳動の所、大分に来と。二時より会、和田氏来られず、ゆえに話なし。

六日　一八、三。田代健男夫人来訪。夕、コ三物もて。夜、警防室にて、団を三名来会。昨日神戸の八十五歳来。

七日　一一、〇、すでにのくとて警防団出動に入る。昨年中琴報八十八回、今年一月は二十五回なり。一二、〇、出勤、一万年筆忘れて駄弁りしゆ。帰宅「やまと川」買う。「トイツはオーデルの時に敗れ、此度はマニラに敵突入」と。

八日　八、三。琴報、今会に出勤、二枚来る。一一、〇、前出勤、当番なりしに午後代りに出ゆ。田山田氏来、砂糖「海」一月号、「鄭和の航海記」なり。

九日　昨夜雪あり。〇、〇、勤、三合俱楽部にて。

十日　九、〇、琴報、丸ん「南の星」一冊。琴報解除一、〇、〇。

十一日　〇、〇、勤、一三、一五、一枚来。帰途、堀知良氏会とかせしに、〇、〇、井出来知る「南洋と華僑」買う。定期買う、三ケ月一七、一〇（昭伝各、池袋内）。

十二日　九、〇、二枚来、丸ん「南の星」一冊。琴報解除一、〇、〇。出勤して書食、池袋駅にて琴報、帰りて叩会、話む、九十枚来り国民新聞社の投稿と。水田鶴子より上写真夫人迎えに来り田、去年入れし病院にて病れと。哀れなり。二、三〇、二三、〇、一枚つゝ。

十三日　紀元節、二、〇、一枚。松井伝治君訪来訪、一、〇、一枚。午後教室にて久保天陸「文部文学」、「ホルトフル語」買う。夜、当番室。

十四日　八、〇、一枚、午後の松井氏破氏の家へ地図の依頼に行く、留守、帰る。ゆえに印刷つを内ム。一三、三〇、出勤。田小出氏、漫画新聞の紙面は同君の出来と。スマトラの牧師来訪、速達にて空襲の呪（祈）文と。一九、〇、一枚、田水田氏（当番）にて

従軍詩歌集
★南の星
田中克己著
「われを国土と思ひ石ずかや菊の花咲く心の御光に撫淫する」
昭和十六年一月、著者が従軍の命を受けて、南洋諸一帯、印度スマトラに赴いた間の詩、歌、俳句をまとめたものである。戦争の「うた日記」になぞらへられた、と思へる詩歌は内容によい意味をもたせ、且、従来の著者自身の解説は、それ自身「陣中の感想」となつてゐる。「詩人の夢」「対支大の実」「在田口兵隊」「戦陣」「兵隊の部」「赤道線」等、定価金一円（〒送料・創元社）

十二日 当番九、三〇出勤、寒し。相沢試験「天壌無窮の歌」なり。
十四日 ㊐荒井平次郎、高山のゆきと。一一、三〇出勤、白鳥所長来らるとて不来。
一〇、〇〇、二機来。
十五日 寒、保田ハンター四半ケルヒ行く。創元社（アかんとせし）一三、三〇警報、二三機来りしなり。帰りて所会に話む。
十六日 七、三〇警報発令、一日所会に話む、女部に来よとのことなれば行きて話す。空襲警報解除、艦載機一中機来と。あるいは十機ほど。落つるとしたし。硫黄島に上陸企図と。㊐中野富三郎、長野敏一。
十七日 七、〇〇警報、けさも一日所会に話む、五百機来しと。西方にルダイヴする二十数機を見し。所会内に硝子にて傷ありし。夜当直。㊐二〇、四五。
二三、二五、最一機ずつ来。
十八日 ㊐二、四〇。B29一機来。六、〇〇当直より帰る。午後鈴木虎雄「戦争大要」読む。かなり。入浴。十七日の戦果発表。撃墜一〇一機、破三八機と。十六日は撃墜二七機を落し、二日間二七五陸、八破と。十数日の母艦来り、機一一〇〇—一二〇〇と。その中、母艦一のみ破りしなり。
十九日 一〇、〇〇神田創元社（中を南のこと）の結社四三、五八巻。神田にて「言論報国書第五巻」注婦人「まちの侍」中屋敷講義」アイヌ関係」五冊買う。一三、三〇出勤。B29一〇〇機来りしなり。帰途田口にて「朝鮮まつり」買う。「下ものしり事典」買う。富田にて芳野清、父。
二十日 八、〇〇警報解除、出ず。一一、〇〇出勤、一五、三〇所長来、話さず。所会に陸南始。
二十一日 五、〇〇一機。九、三〇当番出勤、一三、〇〇より三機来りとて帰宅、警報解除されしより所会にて五冊買う。㊐裕美、五郎義夫中を多「北の村落社会」。
一七、〇〇一機、警報なし。
二十二日 雪、出勤、硫黄島に来襲の敵艦船六百隻と、我が方如何ともなし語りつつ、悲憤やる方なし。一一、三〇一機来。雪積る一尺。
二十三日 雪のため出勤困難なりと。出勤、夜警防当直。㊐所一印、大、
二十四日 四、〇〇、一機来る。八、〇〇警防団より出頭命令、ましん行けば勤労奉仕、教室取前の家一軒をとりこわす。午前一〇〇警報解除となる。一九、〇〇、一機。
二一、〇〇、一機。
二十五日 ㊐〇、三〇、一機、また雪降りしかしに、艦載機来る機来て、所会に話む。
書前一冊、高橋警報なり、一休みせしに午後はB29百数十機来、雪雲の
ゆえ市内をやりし。二〇、〇〇、一機来。二二、〇〇、一機来。
二十六日 一〇、〇〇、一機来。七、〇〇機動部隊来りしとて空襲警報出し解除、雪降りし、
一〇、三〇より出勤、昼食は一二、〇〇まで、午後なし。一二、三〇和上来り、石田のおじい
て作業小屋に行きしに空襲警報（石田由幸のこと）。
さて南をのぼりて昨日は艦載機六〇〇機、B29一三〇機、被害は神田のみ。
午後、ねむ六日、大空所に落ちしと。一九、〇〇、一機。二三、〇〇、一機。
二十七日 一〇、〇〇、二機。所会へゆく。所長所に陸ケしとて、午後ゆきしに所長の家焼ケ

り、弓竜は六時ごろ疎開しるちと。下谷已、御母上半ば廃墟となりたり。
夜大垣国司来り、伝義長たる「南の豆」を見、母上喜こすべると云ふなり。梅井
二階へ来ると。田水はとまる、勿体なしと。
二十八日 当番、九、三〇出勤、午後俸給受けて神田へゆき「支那哲学概論」「大東亜
言語論」「自由経済之論」「高城戦争の解」「朝鮮役」「明史」「事業」
と四〇〇位買ふ。
三月一日 旅団大垣来りしらし。夜警防当直、高山宅一泊して話す、大垣も
来りて泊る。副会団長渕芳雄君と。
二日 雪迄と昨夜の疲れのため勤、高山と石子の家を訪ふ。梅井母、
大垣へお幸母と疎開決心。
三日 一〇〇出勤、帰途赤川、船越に寄りしも無為。田畑原破。なほ疎開ふ
正月の物価三五〇〇。
四日(日) 八、三〇より宮城、百三十機のB29来り、天気三丁目西丁全焼、
ふい洞五ん中さん要塞を焼く、弓傷五名を衛生病院に落迄。
梅井母、いよいよ疎開と決心。
五日 〇、三〇より十数機、一機づつ来襲しのず。九〇〇石田君に代りて当番出勤、
梅井宅理のため勤を命ぜられしも断りし也。佐藤木女史ふるスペイン語字典
医部を受く。研究所との縁はかれたり。田代在正(健男父君)より詩集
の送取。健男今もメルヒにありと。池袋にて「支那人」買ふ。夜赤川君と
舞をかねて来り、葡萄酒呑む、一九〇〇、一機来り空襲。帰宅。
六日 朝、雨、当勤、一二〇〇、一機来。
七日 〇、三〇より数機彷徨、八〇〇奇襲、四谷会長来り、警防団出動を命ぜる、九〇〇より一二〇〇
まで天沼三丁目六〇〇番地のわが隣と刺青する家の五月蠅、不快なり。一二〇〇、一機、
一四、三〇出勤。
憂 松岡静敬「太平洋民族論」、中尾健式「ヒリッピン」買ふ。後者面白し、一八〇〇
砂鬼君来る、三月末入営の予定と。ひばり鳴く。(午前中青梅社来、中也遺稿の
家賃用紙買ふ中さし、来日まで)「南の豆」与へ、彼おそらく弟らと共
り海に陥ちしかのことを思ひ、明日帰阪と。夜警防当
直。
八日 九、四五、三機来。一二〇〇出勤、帰宅自分の古び屋にて言語学「孫文買ふ。南げ
伝清朝実録は和田清氏に話し、研究室に入れと。
九日 一二〇〇出勤、無為、一六〇〇言田馬場より駅まで散歩す。高山宅一の
家へ清和文典をもらひゆく、大根の礼なり。
十日 〇、一〇より警報、昼ため大雪なりと思ひしに間もなく晴れ宮城となり、百三十機
来ると、満月の夜のごとく明るく、大火となる。三、三〇解除、一機宮城に投
弾。
〇、〇〇、一機来る。
駆逐隊暗ひし見けしと。石田君一二〇〇まりて受けたり。
司法省、大東亜省、第一師団、佐藤宮廷、神田、吉原、等広範囲に
午後まで燃える中、お幸伯母の口説、梅井母の説得、命令にて疎開
けしと。火傷の被害多し。宮殿の宮、これまでいろく大なり。田代、朝
鮮の「陸軍省」の焼失。帰宅時伝合して「西ニューギニアの民族」

九、三〇起ク。

十一月（日）（四〇〇起ク）

[illegible]日の[illegible]新聞を引受くるとて一二〇〇ヲ[illegible]豊橋駅に行の、七十八名の[illegible]者行りしは九二〇〇なり、[illegible]中一三五〇宅製[illegible]電話なし事なし。

十二月

一一〇〇出勤、一三〇和田[illegible]来れ、ついて[illegible]、三上二名のみ、けの者線[illegible]外の切符[illegible]りしこのため、[illegible]合せとあり去とて和田君のお話あり、あく迄生きるべきの作也。石君への出書しまり、[illegible]しみし、[illegible]ば我れ君[illegible]来りをる。代吉四郎の電報

三ツ半一八ヒ一三ゲ　チムプニミプシイリンチヒロウシユハイレレイ

！おウハトレマサヤワタシクヤクショニテウエチシアトハラヒシヨウテ

テタテイツツクカスグヘコセヨスミヨシクチョウ

お世世、大辺へ[illegible]ふれ[illegible]とし、我反[illegible]なし[illegible]る。夜大辺[illegible]話す、

二〇〇一寝来。

十三日九〇〇区役所へゆき日のれ[illegible]ん[illegible]とせしに駅目、旅費後[illegible]世ム

しの[illegible]、郵便局にて代吉四郎、父、[illegible]父へ電報打つ。研究所へゆき

告げ手紙、鎌円、石田の三君に会の。大学一ゆかんとせし[illegible]、月、帰り

て阿代[illegible]へ挨拶ゆき、丸メリ[illegible]し、[illegible]防分団本部に挨拶し、[illegible]

四区部し、在郷会にゆき、同[illegible]に挨拶し、大辺と話す、[illegible]

保二〇〇〇来る、[illegible]柄大編隊[illegible]の情報あり。二四〇〇[illegible]帰

る。

十四日　昨日の大編隊は大阪をやられと。[illegible]は阿代谷駅にて印[illegible]置し、大学へ

を、[illegible]人[illegible]の[illegible]「[illegible]」区部、[illegible]豊海には会へず、西洋史研究室

にて会記後[illegible]名[illegible]と話す、井上[illegible]治病気、山上正[illegible]帰郷[illegible]

郷の[illegible]賜[illegible]る文武堂[illegible]りしのみ。文学[illegible]ゆきて白鳥[illegible]郎君に会

し、[illegible]習院（中[illegible]て白鳥[illegible]長に会の。[illegible]の和田[illegible]を行ひし[illegible]

守、十[illegible]根太郎に会[illegible]しに悲しむ。書食を一五〇〇に[illegible]地[illegible]

帰れば千葉[illegible]婦あり、[illegible]井[illegible]治まり、[illegible]君[illegible]定して[illegible]肥

下し[illegible]（八日）と。一九〇〇ヲ数学防団の[illegible]会[illegible]

長よ[illegible]人多し。[illegible]君[illegible]受け、やしばらく話す。大辺[illegible]君も

話し、二三〇〇[illegible]か。明日七〇〇陸組の[illegible]会、挨拶。[illegible]ばかりの。

十五日　六〇〇起き、挨拶の準備をし朝飯食の中、陸組来る、壮行の挨拶

西の[illegible]八組長、[illegible]吉[illegible]会、左座藤三郎警防団長の[illegible]

み、七三〇家を出る。陸組の[illegible]田謙二、若林、[illegible]家[illegible]送り[illegible]大

垣[illegible]君[illegible]中、[illegible]報、[illegible]駅にて[illegible]話し[illegible]行者[illegible]して[illegible]

児[illegible]行八、三〇発に乗る、[illegible]の皆[illegible]し[illegible]思[illegible]し[illegible]会[illegible]、静[illegible]

地方、震害[illegible]ものあり、[illegible]、名古屋の[illegible]害[illegible]中不[illegible]

[illegible]、[illegible]軍人[illegible]く帰[illegible]、[illegible]役[illegible]話す、一七、三〇[illegible]着

父[illegible]あかし[illegible]へ[illegible]る。[illegible]行者[illegible]車[illegible]話せ[illegible]

[illegible]札[illegible]話し、[illegible]答の後不要[illegible]る。市電にて鳥丸行[illegible]り、上

[illegible]区[illegible]山下線[illegible]四[illegible]の隠宅に入る。[illegible]の疎開[illegible]は母の病[illegible]

めと[illegible]明、[illegible]以下[illegible]安心、食[illegible]

経過良好、十一日頃より結婚と、あでれし。大阪の爆撃は盛華街と。
身許調べは父してくれ、通訳官と記入されし由。

十六日 朝、隣家の国を訪ねる。電話にて、羽田と連絡とり三時に会うこととし、行きしに今ず、京大研究室にゆけば羽山成寅氏なり、名後
生は講師を止められしらし、往来して羽田移居をゆえ時帰る。
君夫人（羽田妹）あり、電話にて羽田、父の許へ赴きして、老人（池内
弘雄令嬢）に接ぎ、
引き出せば迎えて今、内藤成中氏は三
軒目の隣なり。永々と話し、夕一、二、三。迄別れ、十七、三。吹きた話
る二女一男もあり。二、三。まで話し駅のへて帰る。

昭和二十一年

一月廿九日　天津貨物廠ニ集ル

二月十四日　荷物検査スル、埠頭にて乗船LST8995

二月二十日　伏世保早岐着、南風崎沖海兵団に入る

二月二十二日　午後南風崎発、

二月二十三日　十八時久部着、山下繰ヤの父の宅へゆけば父上来中

母、大と今井松母と居り

二月二十四日　三宮、家大へゆきしも無人、羽田宅を訪れ暫くして

知る、羽田宅松のやにて不在

二月二十五日　羽田より電話あり、一二〇〇訪問、御馳走になり夜、羽田博

士を訪ね金高寺私、小野勝年、江畑、伝、長谷の諸氏を

偲ぶ

二月二十六日　家大研究室とを方面にゆき、松尾、外の家に、内田

の風、小野沢一、小川茂樹（新妻国塚）氏等と会る

二月二十七日　新田田のところにて忙し　父帰る

二月二十八日―三月三日　家

三月四日　父帰り来る、徳化より十二月陽中の方の煙草と

三月五日　朝より荷物梱包と切符買ひ（三月四日）として忙し、一二〇〇

父の家を去、夜行乗る、立ち詰めれど仕合せ

三月六日　六、五〇〇ごろ着、家へ帰り、休みしのち陽組へ挨拶

三月七日　雨、家居、荷物整理、ちみるより靴二足ゆゑ買はれと

三月八日　寒し、煙草と米の手続すませしのち、和田氏宅へ往

き、金子川文侯宅へ寄りしに消息なしと、宅を去る、鋪

田のところに行く、小野田邸に来り会し、「史上より見たる中

日文化」と題する亜細亜民族文化との関係、同じく「日蘇の提

携」なる（ラ）、三〇〇―七、八〇〇、鄭の五月十ラ、

三月九日　寒し、夜齋藤磯吉氏会長を訪ね、満洲のこと話す、二

見その他あるが故也

三月十日　朝、近処の防空壕作りに協力し、丸三氏を訪ね、同山氏伯母

を訪ね、午後建来る、大連をすべて話す、外宮父へと松村。この日

伝伯「マルコポーロ」（三〇〇）「亜細亜に中民族」（一八〇〇）頃より雪

降る、「中日文学研究」来る

三月十一日　朝、史蹟遺跡のため南陽古にゆく、西川芳氏文学来信

三月十二日　終日家居、父、羽田、時化社、中日文学研究会へハガキ、夜雪積る

三月十三日　終日家居、小宮松氏、打ち、長海へハガキ

三月十四日　午前中　茶室へゆくの保険とられ、十年一月ヅツ、掛けて

一二四〇〇なり、直ち一時金となる。父宅へハガキ、金田出版局へ

出す。

三月十五日　午後往来して国史の為島先生にゆく午前（ゆきて不

在）、羽田の論文を方わらに浦和の叶の嫁を訪ねる

後の部後記　その他なし

三月十六日 一日 家居。白方来る。明日切符買ふ為 [illegible] 三方に出
いて来る後帰途と
三月十七日 (日) 昨日雪降り、家居。夕青木陽也来る。
三月十八日 家居。大迫姉子、大きく伸びる
三月十九日 雨。家居。千塚、中野清兄、任義誠の家、内田勉の家、大浜寺
を訪ひ、小林信之へ行き来す。
三月廿日 家居。無為
三月廿一日 家居。父より㊐、加賀郷土史とお名乗り、字は川
陽の深井氏長、別府に居住すと。父若き頃の重婚等にて人来
す。和田芝吉氏死すとて弔電つかむ。
三月廿二日 久し振りの天気、朝比奈の国司氏一家帰着。二月十二日に送物
厳に刃し也。午後久し振りに入浴、深井、大迫姉子、大小小林、豊
島氏千早午一八伊藤部隊へ行くパンフレット。
三月廿三日 家居。和田芝吉氏廿日一三。九一日ストライキへと。三十日一三三。
大学にて学生の海人氏を引退の話合と。夕方小松原氏来る
大学当時の古事記、日本書紀来る
三月廿四日 (日) 快晴、家居。午後陸義氏来る。自由
勉強に至る。小宮根氏、千塚陸義氏来る。
三月廿五日 亀井畢す帰還せしと、午後左右(中之島)和田芝吉氏埋葬会
に行く。真宗に於ける葬儀なりし、浄土宗なる故、明治の

今世紀に近頃の様子、山に書き入れ中に死者出る
国にて分家教育を書く保と。不快。
三月廿六日 帰還後の状書く自分三四、松浦、前田氏、保田
氏、[illegible]、野口、落合、[illegible]、[illegible]、伊藤の諸
氏。夜南義一郎氏を訪ひ南海、我一月の義を [illegible]
三月廿七日 快晴、陽し、外勤者、和田芝、父より信、文芸世紀来る
山川弘志義氏と。
三月廿八日 無為
三月廿九日 無為、散髪す(三、四)。
三月三十日 一三。ラジオ新者の会とて九一日ストライキ中、和田芝来る
鈴木俊、野口氏、新聞日印、市古宙三来る、[illegible]氏より
送物もる、この夜不快
三月三十一日 (日) 家居。㊐父、大、白島清氏。夜停電。寒し。
四月一日 家居。㊐前田正典、大迫姉子、遠藤内田の妹君
四月二日 ㊐三四来訪。保田白宅定、保田氏津信物厳に来と。午後
小松原の青木へ芋ちゆく。
四月三日 (神武天皇祭) 陽光一家内山ら来る。小宮根氏来る。二氏
中ゴラ帰りし也、書信をとれしし、阿佐谷国山へ中之、坂本氏の
を尋ねしに、ユニまで滞在と。夜再[illegible]。四季再刊[illegible]
四月四日 無為。

朝芝氏の話、朝芝氏の面白き、朝芝氏いろいろ
特典あり、前日は島恵氏（ア、前田、十二指腸の葉さらん
と。（今朝大。前田幸雄博士来診、十二指腸は特徴の
形果なと、入院をみしも直各腹痛、寒冷和三。（蛔蟲証
注射二。葉代五）、

十九日　図分氏人接ぶんする、図分氏は接吻来了のもの傷物廃人のもん
んしと。㊐小林後ろ氏、来よ、芝同直伝の用ろ〜毒消さけと。
来る、おもい喜海、芳野清。午後写物、小ノ奈三五。卵一〇五
〇（三ケ）、紙巻二袋（八〇〇）。前田博士来診。始末ろみとな
る。ちい米（三七、三〇）十四キロ、野菜（カブ、白菜二、一五）、鄭（十
キレ 七、三〇）と配給名し、陸家の河田氏人おしと苦笑する。

二十日　朝三氏前田博士を訪い二言やん室定去来の山入ると。三安と散歩
給（一〇、〇〇）買ぬ、阿伝ノ名いやて古ひ氏和堂を接せしも見きう
ず、㊐大、富山旁を洋史特典中止と、脳卒ひ己去年八月十二後
寝ると

二十一日　始末ひみとのもり、丸き氏をろよんで訪へば山ぬん氏宿すと、同情
しくれしも処置なし、せへ言ひる敬吏、帰りて始末、分寸中
阿伝名ろ卵ケと米一斗もろ事。㊐除虫上ろ氏、伊藤時こあ
と、和平氏ぬ氏に深ひろし。大、小林へ小ケ、大へは氏
注と名ぬと。二一〇〇山内来て泊まてんと、丸元やの教室の
現状へやく、来客のドライハしとろ日終了。ろう、教後二日間
と

二十二日　書ニすの伝氏ろ不快を訴（二日博士ん迎えん入院せと、
ろまひ家へ帰りやアー信り夕方和男と押しゆく、和男「後帰
せよやと」の前屋ん入院
二十三日　朝ろ弱血ろ入しとて和田経男ん血ろみ、一二〇〇終すり、寒
気のろ伝氏みやい元気となる：この日和男パンやてのとまん
きのろ伝はつろと「他の物とう」とろう。夜ろん病院ん
寝る、夕方経男よへし田。〇〇迎し来。お幸海ん氏ろんしと。
二十四日　伝日一〇〇瓦ろしやと、ハ一家ろんしとろけん和井母と阿伝名
いやてたろ、西田氏人、口ろやんめを伝み姉んろしと。一二〇〇
再輸血一〇〇瓦。ろよまろ入院
二十五日　朝ろの検体、出ると。雨の中をろ伝ら飯ん来ろかろんも、
夜千葉来る。山ろ来、陽ろろハ小ケ、夜伝氏ろ下りく
二十六日　小雨、けのろ又始末ん来ろ。日塔。聴石来る、芝書名氏、
市信常ひとろ、伝氏ろ人出下りろ、史温疹と体検
二十七日　小雨、史温疹ひとしとて阿伝名井上医院（ゆく、和田姉の
紹介を得んとやはり不在、耐氏ん親ひ、事ろハ小ケ来ぬ
ろり。ろよ氏ろ下衛三日目、やくい喜形すしのくし如
し。ろ氏ろ、小林後みろハ小ケ。聊斎記了。

三十八日　昨日出の手書十日と、弓子より到りかく。絶食せしと葉のこと
いやがるとのこの大手紙来る。春山氏来る。夕日なるを下田より
帰る。会せしと。けっ丸い会て秋の帰りしを知ると。昆布の佃煮
貰。陸軍より見舞三七吾貰。聊斎つづき記す。
三十九日　三度の薬、国民学校にて召集代のみ、国旗かかげし家多し、中村女
史見舞二。〇〇くれしと。夜大雨来る。病人食欲出ず
三十日　信仰のまた強烈なること、国旗一家人形しらべまる。甘酒出まる。
父すいかき、百日しまるらぬ中、文淵堂にでし話すいしと。入来
陸秀麿、松崎徴、芝之津の知合来り。
五月一日　信仰より夕方下剤。お幸伯母見舞に来り、魚、卵売る。千葉来り
ぜんそく病ため不快
二日　昨日とけめと配給のパンなし。来のみ信仰、不快なり。父より
手紙。文淵堂来。信仰より金一〇〇円をくれ、建物売と、文淵
堂は松浦信仰と、信仰のうるさしと良ぬらし
三日　朝建来り、金とり来る。父に八千建達す。大塚あて葉書
店より青一反の再仕立、弥旅と。
弓子二回目の施術、ガス、富心又三枚
四日　十両、信仰ようやく下痢、弓子は下剤とらず
音（日）大、四日分をつくて学験に来り泊す。永陽竹山やまタバコ
一袋ひろう帰る。春山氏来、橋のしらべ見舞に来る。ケ重の、

（松浦二十日信仰、聊斎
わたすこと）

そこに、明後日と。
六日　永井有良を買て（二〇円！）茶（一〇）買て、タバコ紙（三）買て、大にし
ん（一〇）豚肉（五）買はしめ、聊斎を買続る、杉浦より手紙、五十
嵐達次氏死、三枚図書館にかかぬかと。夕ら即刻入学作すと
大をつれて弟野氏と竹会に行入の手続す。杉浦氏のもと連達、
七日　四日分夕方鳥取（帰る、大二〇〇円帰宅、春山氏来らず、にの
教師の校通令出づ。大に聊斎を買（二〇×四二〇）と金尾氏（の
手紙出す、ケ子秋家に寝る。
八日　項氏孫を取りしと、山内より帰てトラック受取し足和瓶と
レーワとるらしと、母堂とし也。大、五三〇〇立て、六一〇〇のりかけ手紙
一泊と。買物ねぎ五〇。鰯一〇〇。葡萄糖一五。遠藤三。春山氏来
り仕事、春去外三五冊もらやく、四〇〇円ケ子ら家に寝しめ次
事なかれ仕事なり
九日　和男昨夜帰りしと、接待なきを不快。こんにゃく五ケ配給（二二五）、
うるて蒲団（三千一〇〇〇）竹箒（二千九〇〇）買め。弓子堅を使する
やうなしと。
十日　雨、買物鮫鯨（一〇〇〇）竹箒（三千二〇〇）小松菜（七〇）蕎（一〇〇〇）
鰯の配給（五〇〇）。杜甫やる気なる。末吉、芳郎、小山の各君へ八
かき。亀井より手、山下剛源ひて我に出し。大塚来しに、古脱
関係へ辞職させしため。

買物 葡萄糖(一〇〇)清物(五〇〇)鰹(六足一〇〇)竹輪(三本(一〇〇)
配給 ほうれん草(〇三〇)以上すき米着く(外套と捻二丁、机と二丁)
田大、父、二十三日まで居る訳(筆とはいらて依頼する嚴松堂。文へ、嚴
松堂へ。

十二日 杉井さんの名刺、お山菊(訳は三度の二重まる)鰹。成田節男
(日) 氏外務者と。安井さんに伝言書を写しに行く。
る、寒の食を送せと。病院に来し者本を婦(私移りの口論)
買物に出、いわし(五本)(一〇〇)を曹(一〇〇)豆(七五)買ひ、郵便
と大い食はした。

十三日 雨、寒し、三度(足)冷し。後の姉に夜帰らしと、鯖と卵三つ
しつ来る。田葡萄買ひしみして、我出づ。つよ下刻三回目
十四日 戦犯裁判い清瀬博士、はじめる戦犯の長味をを痛論す。母、
郵便を四〇〇引出し来る。市野より千円(二〇〇)買ひしと。吉田さんや
を来れい給二〇〇。礼いもやく、母との話をし。清物千枚(三五)。
夕八二一、二〇。不語(四〇〇)買ふ。依よ、袁足の方一〇〇しもやく。
夕八二紙三〇〇。新配給六〇。葡萄糖(〇〇)竹輪(三)一〇〇。
「いて八の月費す、可相。田陽子。夜大坂来る。手配給二二袋。
十五日 阿伝ヶ谷(清物買いゆく(六四〇))、岡山家へやそしん船越幸と入
れちがひも、葡萄糖(一〇〇)、薬五〇。船越の話いて久越南王保大
退位、共和政とすと。田ちゑ屋(話いゆくと、昨耶、和はそそち

十六日 夕方歯痛どめいスルファレン錠あて眠りしい夜は気附か
ずしし郵方ち要感、寄くい石鹸二ケ寄りし接拶。
吉田茂いて天年陛下と。この法案を堂の人気ちりし模様、安
伊力ろ下ルに也、主食を配りつ来るやら不明。史、依よの返足やの
さし飯買いて久よ(一〇〇)鳥配給三〇〇。夜スルファ使ふ安ら
しにて病院いきて治る、似絵よ四方用の始割寄
十七日 夕八〇一、六二配給、杉浦ち、官長諸長い手紙出せしと。父、保田帰
り埼玉せしと。吉田郵男。配給鳥五〇〇野菜五五。夜芳賀医
大学を来訪をもつて来る。安味なし。杉浦、父、和田さん(八カ月
十八日 雨、昨夜不眠、へお話人訪合峰犬のためより。午後買物、葡萄四〇
自つ鰹三〇〇、豆腐一〇〇(三枚)。小林ちゑ(後文)来れいし。返事のく。
郵仲書氏二人にて一四〇。夜 乾パン配給五九。

十九日(日) 菓子(三袋三〇〇)買いて船越を訪ひ話す、帰途書物書
三冊と新三冊を附けて買ひ(二〇〇)午後大坂と言ひるいやを来
いの方発足、郵(一〇〇十三匹)買いて帰る、陸いもとあし同氏氏
まり見舞として来た、玉芋。来る、のり二帖返礼とす。梅井
母卵一〇、(三五〇)いて買ひ来る、おつケ配給(三月五〇)家族二
着(一は麻、一は綿、スマトラ)と(レ)と(ス)ね文
の遠いのモーニング壹部を母に拵す、この紙を常今いて来の配給

今後ともお買出に行ける書よかとそひとして景況給。久の七ヶ月
出し手紙検閲ありて着く、福岡のよく銘を出すれば一帝五〇〇〇円
て六月●十日まで。

二十日　夕食鍋に焼と。「芸苑」に出ての話「連歌」。夜田敬男、大、吸邪ん
ハガキ。田口君来る、門付各人て外食出来ぬりしと。餅十六ケ貰
る。三宅付（八五四の下宿（三畳に二人、他に来）外つ、提出、これ
は主人用と）。遺物（白菜二百匁七〇〇）蓋（四〇〇、八ケ）買物。夕
方蕎麦配給（五〇〇匁五〇〇）蛤（二二五）。夜の姫
夜祭りとて賑やか。お井（ゆげ）大臣狐鼠ごと。此れ中ごろ比る
ものもしい狂気せしい非ず

二十一日　買物魚（十五匹一〇）大根（一、五〇）茶（八〇〇）。野菜配給（一）。
外稀者より連絡、ある話つかと。青年社の鎮田来り、中色ごとを
はず、古版とるらるりし。室と建治来る。二百円排出の書類作る。
久ぶりに出り来る。

二十二日　朝より一日中の如き寒し、一三〇〇。東大のゆく金中野原田氏に会ひ
外務者ありと。和田氏の俳優を聞く、芸能の話かの編
集中と。夕方家族写真入室二名、卵ケ。夜と（下ケ）。仁井田
陽子、字氏と接拶、投君。和田入場君。未拶俳和氏ごとうん、
鈴木俳氏池田卵い富と。帰途者絵を買う面万世橋にて
る田君の家探せしも不用、文部科記（一二、四〇）会して、新聞二（〇三〇）

買すみて帰る。低ふ瓦ありと、我も也、ろろ三氏の（三氏）入
陸。大臣夜来ぬし会はず。米とメリケン粉配給（二〇〇〇）

二十三日　休日吉田内閣成立。木村琴氏（ハガキ。川久保留守宅へ
ハガキ。江上以下ある モスコーに方の話伝（ハガキ（る
田辺氏の氏ずと）昭子。大臣米（外と〇〇貰れし田辺郎とき
みて行つ。玉葱（一〇）紅磨（一〇）魚（一〇）を買う。妙事坊とる。
なお他れみ五回目の施剤。大臣に絶交申込み

二十四日　朝十七匹（一〇）、菊菊粉（一〇）味噌すしのどうか、遺物ろ二十匁
（四、二〇）。池沢ちハガキ「後見」と。夜に人侵入（ヤく同石胡氏拝石氏
ハと。モスコーのを知りをる模様。見七十二大陽とかい略ハ。
越と二寸後し帰宅、なお下食程ハつを拝匿ごれし、きたてまつ
らず。三〇〇円引出す。度紙（二、三五）野菜（〇、八五）配給

二十五日　雨、池沢へハガキ。メリケン粉配給（五、五〇）烏賊（二、二五）。蓋（五、〇〇）
鯖（七）。遺物（六）茶（二枚、五〇〇）買物。寒くい（三、五、二〇〇）買物。
夕方ハ松まる来りタバコと卵ケ与えれしと。

二十六日（日）晴る。買物菊二、五〇、新紙一、五（三五枚）竹輪九（二、五）。文化
新聞（国和）来り隠筆二十九ケ午前中ハと話す。法政中学と、
北谷さ蔵拝見せしと、鳥谷さ ケ午田ハ来と。郵配給（六、〇〇）。服
和ケ手紙「五〇〇伝ハてハい、家はハま無しと。父ケ金尾「卵剤
表四ケ」話と。ちちのもと。大。山崎さ溝ハ口ケ松まる（れ。

五月二十七日 晴、買物外輪二〇(九)こんにゃく(三)。配給醤油五合(三)。
かしてもらうのキ。肥取、父へ八かキ。うみ元気となる。夕ゆう(二、三五)。

二十八日 移植へかキ。午後買物外輪二〇(九)鯖四匹(一〇)、茶(五)。
陸物(七、三五)。来山女を訪ねし伝義者を多くかりうる。文化新聞
はその紹介なし。配給遺業(二、三五)。言はないて古婦清人「高
欲旅の舞風を活」買よ、新刊本は九、五。珍し。母より来五合
(二四五)卵一〇ケ(三五)買よ。後日は知らず、営業を損ずる所多
しと也。

二十九日 蕪(六)、煙草巻紙(三)買よ。九、〇。赤越来り活子中「文化新聞」
の印南宅来り夕稽ルちゆく、一四、〇〇外郵ないゆう 和田氏
を中のいお合せ。錦士俊、昭井、与野、壁宮谷、市古、新
婦、中村治を御、野五四、氏、移郷者八の活氏。南げば地はをを外
年三回宴を開い引渡らんしと。十月十一の再い会合と。帰金
市古と会ス二〇。。山内を訪ねい腰掛出ました。伝さをしく不
在、毎ちいかケ、胡山を外に心残と、今活い来しと。今を中
婦い回宅半五。いて帰ると。魚類配給二六。夜七垣ないまし
も不解。

三十日 晴、山内氏を八かキ。銀行配給(一三、五〇)。こんにゃく(六月)買よ。
この日畫寝堅んいす。

三十一日 朝大垣来りし合ばず。買物干魚(一〇、十七枚)遺物(七)。ちゆい

暑ケ来ぶを見る。前田医院の書生氏い「天祥地寿錦三
冊」貸了。回わかいて来、芳野氏、千葉、板崎氏「ちゆい来りしと」。配給
おつケ(七五)野菜(二)。俗ねおと喧ケ。口型をいとか。
朝再び大垣来る。会はず。書一を家いて会ス。鯖(一〇)蕪(一〇)
言はないゆを「今昔物語」(五〇)「青い鳥」(三、八〇)丈ん買ひる
か。げの大垣を便を頂ス二(二五〇)モーニ(五〇)い買ス
る曲。夜七垣来り、言はの家へ移ると。前ん来し林ス二馬、
稲荷使者の便ス。ちゆい来り脱のを也。げ(夫の)後援会費
五円ス。陸紙いをし奇言試を後見して移移「南ちゆいをし」と。

六月一日 「ポ」三月の国家観点」。

二日(日) 建来る、言ス休暇と。買物鳥賊(一〇)麦粉(一〇、四ケ)。
「乾」南市ス姿清ス。「ちゆい」ケ会ス。必需物資入会ケ待受る。

三日 朝「聊斎」午後「紅甫」書く。買物こんにゃく(六)ゆり(二片一〇)干
豆(二五片一〇)遺物(七)ゆしちゆを(一〇)。配給婦業(二、七五)。保
円、大ちかキ。大垣来り竹ん垣をる、我ス左の「蕪村」を
ケ。な他ロ本六回の施刷。夕方ス雨、入浴ス。
ケ。

四日 山内氏ス来り、明日帰落
をしは埼玉ゆを言ると。二〇日後し去合せのひ。ケん久
ぶりて来配給をしか、二キ〇半(五、八八)ス、今月ス一人
三合五勺と。ゆしちゆを(二、五〇)配給。夕ゆう自ちい言くい買

み。夕方より雨也。「松甫」書く。「聊斎」明日いて巻三紙（ん）とす。

六日 五し 此夜半に「聊斎」終る。大なる手紙、六日分より仕出さる。

建の話にては「河野家老帰来」と。

出す。兩向買物、諸物（七）茶（一〇）キャベツ（一一）、ちし（一〇月一〇）ぬり（二月一〇）。松井母、岡山伯母を通じ七日の来ると（手しくれしと。

六日 云ひ図書館宮永氏より書籍「月好四五」。佐、向は明郎世話す、「来まり話す」と。建来る。食料買（ちしと、「聊斎」と原手紙を出す。池沢まり話す。鄭州にすしと。西、又私へ復職と、主婦弟まだ帰らず、比亀と。飯食し泊る。夕べ二斗の分配給（二、二五）。魚（三、〇〇）。母バター（半ポンド一〇〇）。

七日 池沢七、〇〇帰る。「松甫」に惹かる。買物キャベツ（一〇）諸物（七）ぶどう（一五）。宮永氏より区事速達す、和田氏に話しての。十三日より頃やらと。買物の留守い印南寛来り文化新聞十一号おきやく、「比亀の私」のる。話九りの十日にと。依る十二折隔わるを救ふ、史の病癖はおほひ全快。

八日 山内四郎来る。明年い速達る。依れば八回目の施刻。うるめ十一枚（一〇）。書ハ久し振り。米壹を金壹をかく。

九日（日）来客さし、買物うるめ（四枚一〇）ちし干（二枚一〇）、かくらし粉（一三）ちり（一〇）廿枚（二、四）清酒（七）、母より卵（一〇ケ四〇）、配給。帰宅と

馬に蹴られし也

十日 柿干（三、四〇）計一〇〇匁。「探偵」。外務省のこと係る。野田又さるかの中、五十嵐氏、満洲国金州にて去年六月病死。肺らし。保田、野田、柿崎、小川、杉浦（かき）。

保田、野田、柿崎、小川、杉浦（かき）。

米若干、夕べつとる、印南寛来り知らす「来る」。夜明伝り給へかて船孤と共小母と話す。じゃん二瓶井上医師へ呉れんと（三〇）、切符のこと、十二日三井新饌、仕出陸軍宅へと。

十一日 外務省のかたとて来る一二〇〇ゆえん和田氏より、氏は見れたえんと。野度氏より南げは、橋りの話して同伝人銀行教と氏る。あじ（一〇）諸物買て帰れば明郎ちかき「宮永館氏、月末に上ると。あてる阿伝今つとわりいゆく。井上医院（一日ん（中封後一三日）と第一瓶かる。煙草買ふ（七〇）。

十二日 牧師経さしちかき、未知の人なるに知り如く記す、不審。夕方佐野博夫来る、じゃんちが洋服時スコトンプキンとやうと。処女なるくること。氏の書寄る。夜大臣来る。紙ひかけ不ひて入浴けうしんメ一〇〇文と。退院近くるこれけれど金に困る。明郎新速達、宮永氏を送えて行つ。魚配給（五）、ぶかし（30ケ一）。

十三日 晴、朝て。公（速達）二〇〇。信用申込む。大臣より金来りし由。野菜配給大根四ツ（三、二五）。佐紙をけ「配えて買物ゆかせと

宵月

蚊帳。ゆりて。互殺（五一〇）

十四日　俊たゝるを侯爵主とした由なれど（俊三四ろ二四）、ろみ笑ひとしり。入浴。建ろ。ろ帰しまる。大ろ平氏。明日支渡史講演会と。夕方山田新を辞まる。用書ひ上まると、今夜は食糧いまるかと。入浴。松南四十八才。夜石塔まり、帰職中出でしと。

十五日　明夜波ろ不足、大坪にて買し一〇〇中、米三升（二一〇）バター（一〇）ビタかんス（二〇）その他引き五五。外受取る。おかぢ女ん入りし物一貫（一七〇）金貨一〇〇文（五〇）とる。俊拾位四日中ろ分からず、ろみはるしと。大ろ女田の出書、日本の侯爵人を賜まる。

十六日（日）伝兵衛ろ小カキ「三津ろ帰りし」。配給（魚）（四三五）。寄くし一ひまる（一〇）。麦一升三五にて母わけ買ると。夕方ろ雨ある。

十七日　雨、朝い止む。亀井界ろ月午紙、荒井平治郎帰りしと俊紀ろみまた施割、菓子買ひて二見に飲つ（一〇）。夕方寄れ松ろ電報来ろ、来ると。新橋来し船到着とつれまろ阿代多の中を。かぢ代女ん切符とろ。

十八日　事一二、〇三井社ゃを。かぢ代女ん切符明日と。引返しの金、藤森道ちを訪ひしれず。昼南ろ同ちせし元三井ハウビヤ氏、花巻、買物寄すろ（四枚、一〇〇）。暑し。俊紀よ、ろみ中の家ひ寝る。史齊藤の治療要ス。〇請求ると水しも、来ないまるる。計四〇〇。九州の長崎哲夫ろ原稿依頼の電報。

十九日　九、三〇三井社ゃを和田一天名義の証明書要ス、見物、新橋銀座の建築を通りて日蔭ひんの東亜支通公園にて母出市まひろ。俊買ろ（紙袋七四〇〇）。一日一家へ引返し、二〇〇出、なま駅の地下道ひて二二四〇まで終つ。ものすして市を端へ入りたるため分れ、地ちんのし街七ちを身と俊し堀銘ひろ。

二十日　静岡俊松南のみ眠ろ。寄しま一二〇〇ま郵着、父宅へ入り、母浜子へ電報、和田へ速達。文一七三〇帰り一〇〇ま寄る接拶。今晩ゃき話す。聊者は駅月。五〇は松南のとろと。

二十一日　九〇〇出発、二一〇〇母俊ゃへつき外語ゃを俊郎へ会ゃ、父三井位去あり。一三〇〇寄小銃を会ゃ「郵郎会へてきまるゆ原石寄ると出、結果は一用内後電報ひと、彼位手当ちゃくくるしと、なまま本郎を〇の添書もらひ、書庫ひる。清、明両宴飲ろ。今野位二の書二十五万円ひ入りしと。服部の家ゃを アパートをる。その他ゃ鈴木女ゃ借りし二階家ちと。配給ひどろし、近ちの農家ひ寄鈴薯野菜買ゃと（一貫目馬鈴薯コエー三〇）。不快「中ゃ筆、右手ゃ女をる非人ろ。ろるゆは俊ゃ。快ろし。

二十二日　て二二〇〇ま郵へ入る。（外侯爵士野書人を、書侯爵ゃ左路）（ゃ会ろし野逸）ちろと。羽田ろ電報ろしと。正路へ原稿書。九州のさ銘ゃ弘訳し寄る。一〇三〇羽田を訪ゃ相談せし「光ゃ」と。書一冬馳走とろる。百後ゃを

安去せと。北支今西春秋氏。（一日夜帝電にて郵送の[illegible]見い合
り西銘司、江実帰えと聞さし）代表者も帰りの時勝手も帰りしと。
一五、〇帰宅、夜帰りし父いと答（〇〇〇も去しと（後ヨリ知る父い今ヨリ）
悔しし苦悩す。

七月
二十三日　父二〇〇くれ、母、大喜一〇〇。おてゆく。建ゐ移る。一三、〇〇家を
出、来合せし（石岡子に）乗り（来原下車）元海岸（[illegible]）と話す。いま引揚船い徴用
と、相面するの子、（大垣の乗り）（沼松行の）大垣行車、駅にて喜
宴（二樽、田）実夫、（一）煙草（五〇〇）、羊羹（二〇）、茶代の祝金も
十三時時ととうしと。一九、三〇、ゆえ行に乗る、出み合せ連帯、同家と
話す。不眠。

二十四日　朝五、三〇、ゆえ着、帰なのゆえ三〇帰宅。書了寝し、前田増七、酒
持ち、茶を出さなく。万年筆買ひ（一九三）（五〇〇）の合動帯（昼了）羽
田ゆえ茶書来てゐる。行立ととうし也。夜三時の帰宅祝、かで人の
後手伝をする、我と反対ない、今いかはらん。（家で一杯ゆえ祝。）
（仮設。）

二十五日　郵寝して起きれば書一級（ヨ）杉浦、佳給ゆきゆきゆけれと
書一すも安い方いかなかを愛みと、我三宅り十冊ゆ。久ハコ金
鶏園ゆえて買よ（二）、夜和田ゆえ出ゆえとして靴下もちゆく。然
越と話し二二〇〇帰る。

二十六日　安山氏一一〇〇。帝立氏二名ゆえ来る、同人組合ゆすと寄ゆ、ノート四冊
と給ゆ。午後神田へしゆえ愛ゆ

やさしい男立八ゆて郵一二〇、氏一二〇、必ずて亜海ゆ杉崎氏
男ゆ花多（一〇）ゆれ、ゆ郷ゆ花五〇と、くとゆて帰る。

二十七日　終日家居、杜甫珍聯。遠ゆ「来」ゆ電報ゆ。夜大垣来
り茶物二枚拵す、ゆ枚まる（の祝し話す。

二十八日　終日家居、午後来る。来ず電報「三日張」ゆ寄。杜甫書く。
夜山内来り編上とこゆともちゆく

二十九日　羽田ゆ八かき、（天現白藤板）を拵みしは帰らでしかゆと。前田増
去氏陸すゆと。

三十日　朝三時ゆ電報来る「速刻赴任ゆ」と。和田をを訪ね、行ゆ
（ゆ）「いかくも可」と。ゆ立拵を訪ね、ゆゆ書三冊買ゆて一五。
飯多い。

七月一日　朝大来る。午後遊谷（ゆを影山氏）訪ね、保田の清島園く。帰金沢
山氏訪ね金牧氏に代飯ゆ、ゆえ、煙草ピース（一七）買ゆ（ゆ日ゆ）
ゆ徒上、ピース一〇、コロナ（一五）丸を訪ね。帰りて郵送、岡山家へ拵ゆ。

二日　昨日夜和田氏と三人談話いゆくと。
午前中外務省書き二十枚ゆる。白鳥氏を訪ねし留守。
三現教ゆえ大教会（ゆを山氏）を訪ね、
ゆと借ゆ、ゆえてゆ、ゆ代、一駅目ゆ。斎藤研吉氏と南
増氏拵ゆ。

三日　午前中桐嶋来り、一年身任証してあやまり、鳥井子よ。駅より

帰り市役所目とのこと、二年羽山君と共、外務省へゆき夜行（三十六枚）
送し、太平洋協会にて講演をあり、ツーリストビューローへゆけば既日、
なる取りて居れば先講習所にて切符買い、疲れて帰宅。梱包二ケも
て関係各局（ロモ千有物抵抗のみし）一ケ送る、梱包し直す。
夕方羽山君夫婦迎えに来り、洋服簡単約束す。稲垣浩邦無事
かへりる由。

七月四日　四〇〇出発

奈川君来り銀行に三〇日受る、ていくしの同志三人来り、野山氏より
手紙とる。暑れ、家具とも一切依頼とする。十時すぎ帰る由。
午後文化新聞来り支度の文（三枚）の原稿制一五。是ナ、西
太后のこと送載せよと。三枚四時半ごと。ちい巻みて別れ（金
中い頃を一立いて写り）池田氏を訪ね、伝言をなし、伝言なるを見、
王理へ「右日迎に行の力ナ電（ナ）」あり、山久役者雄氏い部迎え、後
招し、煙草屋にて五十ケ（三〇）巻ひ、国田志紀氏い別れを
告げ、夜稿書とる。

七月五日　不眠、四〇〇家を出、五二〇発の大阪ゆき乗る。向ひ
ナ女子　実に
主人、氏の弟、心清霧社の任務部の女子ら歌年ら長浜いゆ
くと、後してくゆく。一時国近着して一九〇〇京都着。

七月六日　天理ゆき、服部の所いゆけば、五〇徳島へ帰郷せしと。国元。池
し、図書館ゆけば、鈴木宇治へ、新井とし女史に話せしのみて、
服部宅い帰り、手続群をいたす。

三宅伝永にて文駒氏と伝
し、ひるより帰て田中治郎
と会う

管財課いやもしい、アパートも既日と（住宅は田中治郎をすし
と）。帰宅の途、鈴木氏の部屋にゆき群象と諸
、要領得ずして宮田和一氏のみなる主人氏に帰る。

七月七日（日）朝羽田を訪ねる Shuyler「Tekestan」二冊カセし撮ずを
頼み、帰宅後、今井祖母い礼にゆき、後三氏おそい会う。夜
国分迎後と話す山宗米論多

八日　戸迎して十一時出勤。亜細亜文化研究所との談合せ、すべて
尾崎せしい既日。服部宅にて泊る

九日　八〇〇　事務室永氏と中山常を訪ねしも会わず。夕方ゆきて
風呂と飲とふるまはれしが、家は既日と。服部宅にて泊る

十日　八〇〇出勤、はじめて教祖い拝礼す。書庫を巡覧し、布
留いゆきしも家なし。午後伊田を訪ね家なし。一一、三〇帰
宅　午二時中「四天石三枚」書きあげ新聞へ送る。後をみい通
十一日　午後煙草買いに出て羽田を訪ね藤のもとケ弟は通
せしと。一六〇〇帰り晩飯食し、父い酒を出て（食程のことを
世話出来ること）、奈良へゆき井家に泊る。家にがくと、
十二日　井い紹介の方新聞社の方に撮ずを拝頼する中文女女明る
ぬくい会い、松よりけば来い便りをしと。陽子部の自転を
すし（マツリヤ入院中の便りをし）一回ず（十九年十月）家のこ
ちらみて、服部い帰り、夕方宮本氏を訪ね書籍の講義

肉く。馬鈴薯一文目十八匁の五貫、煙草七、五。（十三日）、来書（十三日いて十キロ）ていて居ると。下駄、十五日、茶屋十日買ひ、宮ふく（給十日。

十三日　八、〇〇出勤せし大掃除、服部宅（帰りしかを駒藤旅に家と とありしかく。十五日堂の大元肉にして御ちく、五十日と。夕方まへ帰り馬鈴薯二貫目ふり

十四日　来年をたち　宮ふく（ゆき　元山仕度旅を　ひしん吉和石一郎に会ひ、番稽古歌会に出席、とにい嘆る。四貫ゼニ即、場内民一あり。場内は流石にいるしと。一八、〇〇出て谷町彩を捕を　ひしくい大家（ゆきて不在、家にて帰れば服部帰宅しそう。二二、〇〇まで待て。

十五日　出勤する経過なるべくの、タイプ一枚ずつ。夕方散歩に出、うち買ひ、氷水のみ。夜社宅を訪ひく。

十六日　宮ふく。なはタイプを教ひて。保田を訪ひるにを出る。他にるいい賀。有名吉印ふ手紙。

十七日　宮ふく、図書館へ蒙古の人来る、タイプ六枚うつ。一六、三〇。汽車にて横井へ行き保田に相で会て、家のをきしし駅月、二三、〇〇帰れば　ゆきよりの手紙、医療費二三〇。四、一文代新聞を頼とうん来ていしと。金送れと、大坂一回司来ていし相ゆし来と。ALAS!

西陣　二五。四　図を郵送

十八日　タイプ内第いちくるる。服部と松ノ内（家さかこんゆをしし駅月。帰れば大来り居りしクラムの一〇。ルち来りしより、馬鈴薯二貫ちし帰す。けの第財部を来りトルの家の屋かおい つを入れと。中島の男相楽寺の仲人せし人の二階るい家ちし疲る。服部去人の男謝する餞ち

十九日　出勤すれば餞長、今日は七俸の日割の外と。服部とい事長の仲ゆく当ちしし行立ていとる。二二、三〇帰宅すれば他にの夜一五〇。ん宮れ、大古代の残り一〇。後で。一安心す。新宮しの角者へ行れ宮（稽古歌）駅記（聊斎志異）送る。わ林後くへ。

二十日　一五〇。電報為替（林と新三五）偽ものへ（東）送い自力で来れと。母ひ行へしい蒙駅目と。馬鈴薯一貫ちと、二〇〇。記せる。午後三時（ゆき、九五、大なれ、そそばんさへ（後の返事ありし。千ちーん投しあて一〇五。ナるりしけ多くあ五て百貫匁買ひし。ホ〇一二「西北費ち行二（一七）ぶり一 1/4 ポンド（二二）買よ。病癖。葉タペシリン（一〇）買ひ。

二十一日（日）一〇、〇〇家を出、坪井明を尋ねし歓劇。元山を訪ね、名山ひを捕を訪ね、家さのし客居日、古和正一に会し、そもし話し、喰茶店へゆき（台風）二〇、三〇服部宅（帰る。略山

仏壇の服部宅へ寄した由。四谷中絵の変化をしたらしき事の報告をしと。

七月二十五日 午前中出勤、午後保田を訪ね、揚井九七六来区。手紙了。慶氏の二部見返いやく。夜食保田父子、本村師と。いつす、保田の父君地主訪氏ふいて話も人なり、二二、三〇。服部宅へ帰る。

二十六日 服部老人、昨夜より義弟中山勝治君のところへ泊り、朝食始末をする。月給七律の一四三、〇〇と家賃出張手当一四を渡す。夕方谷口新を訪来る。桐山さんの手紙、依頼状、洋服簞笥司士。〇日ととて寝はひりしと、安面、電報二三ヒカ八と打つ。

二十七日 出勤、昨日の日直勤のしの為、服部老人夕食せし、一八、〇。九の左を行いうまで行いのへ、二一、〇〇帰宅。前日今日。

二十八日 三、〇〇床、雑書しら父子一〇〇行う、往来へて家服着五、二二まで行く来る、疲れたり、三〇まで着、帰宅、寝。

午前桐山夫人ばつのう断りしと。大江図司金しら来る。外務省へ来たと。

二十九日 午後寄遣りし、駅へしら行くんとせしたる来る。三〇。(衣物二枚)治す。前日ばつたる。〇掃ひ、ちよの分すみたり。洋服簞笥五〇〇へて31日ゆく。夜阿佐谷へゆきメリと移代掃れ。来一外(七〇)寝ひ後

第る。久ぶり先一五。

二十七日 下痢しているし、午後高義士、印のところへ聊斎の三冊(二〇〇×62)もちゆき、夜寄氏へ次銭もちゆく、千葉まで又不平なり。

二十八日 (日)斎藤吉氏来る、屋結多く住る接接。陽氏メリケン新宅ひい来る。コーヒーの配給あり(四人合して24月)、ちもかたし郵便で送らんとす。岡井さんかキ帰宅せしと、あでたし。角け書店より速達四条弟3ちのこと、北前出しなし。堀辰雄氏病気と。午後寄山氏より新しいやを要酒のまるの丸完ゆたし筒字給る。堀辰雄氏の義弟加藤義彦を訪ひし日、船橋と話し夕食外馳走となる、包紙三九、〇、組一五、〇。いてがとノートの一部二十個ん包紙す。

二十九日 朝細包の日方四キロ以下のもの十五個門伝谷に通郵便局へゆく、ち人出ては入すとちゆん書直して出す、一千四円、みるんて云寸ちゆ、濃紙帰りて四キロ以上のもの細包し直せば七千となる。三時見千伝ひて千ちゆ中二千造る。

三十日 昨夜より朝いかて伝紀より昨日宅おしいしいしゆ中の千円遅れ、去飲んナフタリ入れあり、文書い届け出、銅盗ん来る。切符買えのその点ゆゆき、九、〇。ばれ両児宅不在買ひ来る。陽嬢ちゆを叱る。陽の事君文書い呼ばれ内海ゆんりしとゆれしと。からクタ寝て三〇日時計一〇〇円、姉より二〇〇日遅

済と勘定が四〇〇円になると。お豆を買へゆきかねる
ゲます（二八）。米屋於園氏はいつ着くや不明と。樋口さんより
信り手紙物二ケ所届各々届く（配達郵八）。文に新聞の古紙者来り
西太后と云と。（一）とのりしを置ちゆく。花屋君へ行き延期の
ことをのべんとせしに返事をしと、空宅のまゝみ居る。夜丸三氏を訪ね
て懇談、池田微妙君へ行きしと、他郷へゆきしと。多くつゝ十時ごろ
ちかく自由は絶望となる。三ちゃん今西君宅と中谷田組と訪問。

七月廿日　朝細包、一一〇〇花屋君の葉書を受取る。
丸さを事「官場改形」を施子よ、さて近くの神田豊年
卵い同る盗ゆ自動車盗みし、前日古城古物商来りしを、光
（来りしし、又のんてゆめ）れば彼方はあるのを也、計正、手紙いわ
もて相井い地ゆ。昨物即仕と各駅へもゆきい受取る。細包
不完全を也、憤慨して帰る、大野屋さんへ地ゆ、計七ケとなる、九
十日位と云、大正図司手仕ゆ出る、大正の絵二枚地ゆ。十八ば
すい家をあつ、角の松山タバコ店のみ出る。後ゆ姉、高ゆ母
駅まで送る。三郎兄ゆ駅まで送り来る。急行車ゆきいて
置ち（一枚三〇、三枚）二一、四〇のん乗る。満員にて上に坐る。

八月一日　大、〇〇ま都着、昨約をく安帽ちゆみて一〇とられる。書寝後
し食ち夕方和田を訪ゆ、留守中千ちゃん三十円、十ちゃりし一〇。
ちとかつもんと受取し礼いソーセージ一鑑もちゆく、和田諸氏

入浴に来られ若城久治氏、共現図書館に外メかを向ける。
二一、三〇帰去。
一〇、〇〇高を出、樋井ゆを伴ひ高いゆを銀行ソーセージおれんす、女とを
来正言い後ゆいゆをしん大里、ちちゆ、昨物二ケ所受一五ケすいつを買。
一七、〇〇服部当をいゆを夕食仲勉をいる二、三〇帰宅、樋井し
閉市すいるし、服部夫人玉葉買をくれしゆ。

八月二日　三日　雨、家居、書寝す。留守中長井昇と大阪ニテ会ひたるを来し
けかを今日ゆ、ゆて之る、夜影山氏、長井昇いゆ来。

四日（日）母いゆ、午後四人連れで和田を訪問、帰途ゆ子供書
房を訪ゆれば前日仕ゆ破ちり、帰宅後のり新話（九五一、六、四）鈴
木屋（一〇〇匁二八）を買ゆ。多くつ出ケいて「もんし」二円。

五日　五、三〇起床、寝室に置いて共現いゆを服部夫人ゆ面給の来（約）
と書葉（二束）と受取る。大麦五〇日いてあるゆちり、明日迎い来
ち正へいまゝと約束ゆ。一〇、〇〇来正言いゆを書食後細包解く
ち包三〇ケゆ来ゆちり。建一五、〇帰る、来一升二合程ゆ。後
ゆ宅へゆを本一ケと鈴と渡ゆ。夕立。寝くい寝ちゆ三時
寝く。大阪三ケ所十京都二所へ葉書。

六日　七、三〇〇汽車にて母はゆを寝れなくに接移、南瓜とかを餅
七ケ明卵色ゆい茄子二母と（二七）胡瓜一母と（一三）買ち、南瓜子
へ茄子もこゆとゆ、ゆ者一升買ちゆ（一升五〇）、一〇〇円渡し、ゆ保

痛みとのこと。迎へ来る。留守中、保ちみ十三日までの主食配給受けし由。陸軍省への接拶もすましぬと。保田宅へゆき電話と南瓜と針ともらひ。和田先生へかき、中村後ろ手紙。中村へかき

八月七、杉浦ひ一に塩原行。午三時、岡山着。池田茂、行はぬへかき書く。一三、〇〇の汽車にて図書館へ。宮本、中村、とあり、その後、満ち八旗通る。服部宅へゆき寄と茹子受取り。一九〇〇の汽車に乗りて帰宅。留守中、大変り二七度七七

来し由

八月八、西宮、后。(三)書く。羽田、宮本先生、坪井へかき。幸山後三時ごろ浅野、佐藤、池田安治、池田安治を訪ふ(かき。一三、〇〇図書館へゆきハクーと蓮を大量借る。服部宅へゆき一〇〇日流しの書一冊貸して帰る。重し。保田来りて手紙渡す。高岡市役通三丁目南風書房より十二日来ていた鉛筆品お伝二〇〇枚を、階の通事務所、(午前三〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇)

九、晴天。郵便、西村、小山、長谷、松本、来る。坪井、宮本一に行

石の接拶。亀井昇氏へかき、十一時頃来る。教授たち中書一冊し

ちゆく。三時後出来る。庭木を家屋、午後大塩園司へかき、公配

宅、影山正治へのかき宛名不定合のため回送する。夜が寒くて洛

寒。パイプ五日にて買ふ。夜、吉郎へ「換歌」送る。

十日 大塩園司へかき、七、五。の汽車にて母出来(ゆき図書館へゆく、

満ち八旗通る。帰途、乾物、野菜、たい豆、服部老人足に脱物を来て送る。野菜通る。敦盛、ちくわ、玉葱、たい豆帰る。保田宅へ夕方ゆきし新揚げと。

十一日(日)中野清之、書来陽宅、山田氏、前田氏来へかき。午前大走り三論(ゆき大麦五升もらひく亀井昇来書館食べ、帰りしを服部氏宅、荒井平治郎来る。夕食後保田の畑へゆく。野菜ルートと大麦焼きのことたのむ。

十二日 白鳥宅、手塚陸義へかき。中野新五ゆく一三、五キロ挽きて四月より、大麦し坪子と、午前汽車に乗り帰れば保田来る。野菜の補給路ふたり、四番三〇〇(三十分)書きし郵便局一六時ごろ

十三日 主食配給日、米麦併せて五七日。食の菓子配給、不味して食べず。新潟保田へゆき野菜わけて貰ふ。午後ま都へゆき米二升一五〇〇円で買う。鍊一二〇〇、マッチ二〇〇、寄くじ一〇〇也。

十四日 庭木を家屋、夕方麦五升押して貰いゆく。明日来ると。三好通氏

宅へかき。

十五日 保田家で野菜と大新と分けて貰ふ。午後母出来へゆき服部氏人

ルタバコの配給しに帰れば和田来たり、大麦四升しちゆく、三〇〇

預けゆく。

十六日 出て九〇〇出勤。服部宅へ荷物着きしと傳言す。帰宅後保

田へゆき松茸一車ゆき貰ひ戻きて帰る。池田氏、来る。荒井

八月

十七日　堀田氏一家八名、来る。加藤山、芝井と十八日来るとの電報あり。

杜甫より絵葉書。徐氏より保田の方へ行かんとて唐津より。

服部夫人より伝達れて一二・三来る、まもなく荷物届き来り、解く

一八・三。退去、夜院住に挨拶す。谷井氏そそくさ八名も

十八日　朝満州電話なし上海。一一・〇〇頃野谷さん来る。夕食後羽田

(日)　氏訪ねに明日京都病院へ行く清水博士会合。主部へ白島

行くとそそくさ帰る。

十九日　朝散髪、一一・〇〇大学病院へ行き千葉さんの方へ行く。その

後検査せんと。帰途薬局にて硫酸マグネシウム(六・七五)買ふ。

(一七・五)買ふ。一二・〇〇出発、二九・三〇梅井義助、内宮拝礼印二十

三日活版とのかき。

二十日　服部宅へ行き主人留守なり一二・三〇帰れば建来りて八〇銭と

ゆきしと。筒井紙ゆき、話し且つ聞く、衛陽作戦ゆきしと、

処摩邦松の後任宮司戸阪長らしと、薩摩芋蒸すと聞きし

と。猫寝ていてとり捨てしと、三五〇万元の

金しるしと。面白し。いま時職ならゆに戻ると。一九〇〇迄りのへせ

しのち、保田に行き父君と話す、保田と散歩、もん写ひし

二十一日七、五〇の汽車にて母はゆんかを多へて配給もらひ、前より少しもらひ、

図書館へ行きしに鈴をあり、之を一借りて鈴を入れて梅樹と

梅井氏のこと了解す。義氏松ゆき図は仁谷氏破れかへら

八月

し。一二・四〇汽車にて帰り夕食後、陸氏と話す。内山正子手

紙、切抜き書き。「海南島の蘇生」しく以来「自」書かん

と思ふ。

二十二日　出勤せし後りと、(日)明日のことけりて出でひしい内宮拝礼に来る、

明日の第の祝姫式のまつりと、とし梅井義助保田へ行かん、

山田弘毅氏と共に仁谷の女と共に内宮拝夕食後宇治

へ行く。松尾亜海ゆきの日、月末ころ上海すと、息井、みの義吉良

ゆく。

二十三日　依まは新聞、後の姉ゆ南風書房の二。月刊誌、塩野内閣

書次江ゆと。お宅代二。円と。池辺茂、依の松任信ゆきの

ものゆき書数迄る。手塚陸義。一〇〇〇お宮の数数なる内の木村

井田氏ゆき依の詩寮ゆく。一日横臥して書く。梅井氏ゆ依の

史ハガキ、塩難ゆ方次決なしと。

二十四日　山久保ゆ、竹山時敏ハガキ。内宮拝礼、終と来るのハガキ、つづれし

検閲して運く来る。夜まも寄(三五)と火鉢(五)と買ひ。米麦の

内の分配給とり来る。

二十五日(日)　一日杜甫書く。明日ハガキ。夜住田家へ行く。去れ三氏芝井手

ばらのハガキ、蓮花七八月号。高社ほ[illegible]と。松枝茂夫

「鉄花縁の話」買ひ。

二十六日　図書館へ行くとなくしかし止め杜甫かく。七五一夫、内ひるの活動。

八月二十七日　八〇〇富永鉄長を訪ひ、多用にて俸給明日、服部帰りなきを聞きて辞す。支那語教授来り居る。一七、三〇帰宅、祖母田来り居る。おそく迄話して眠し

二十八日　八〇〇の汽車にて中井俸給を一七（税金四七、四五）受ひ、（会計部長）家のをんな接拶にもあらず、養活れ（中井は部長）と、「鳴外」しられて帰る。汽車のすぐ電車にて迂回す。明日より大雪なる他のものと手紙

二十九日　八〇〇汽車にて母様方へ中井を一〇〇〇まで（島村）会計部長に会はんとせしも駅員、手紙を託し、服部氏人を乗せ（一〇）分先にて帰る。（北南）書を明日に延ばすことにて帰る。父より手紙、外出なりしか中。

三十日　家居。来客、国山氏、伯母、本去客先も、前田正典、野山正治氏来信。夕方鯖屋より来る一四三四円と。

三十一日　北南書きて了る、二〇〇字詰四九二枚、夜保田（ゆく、市部）（北南書）

九月一日　九〇〇上野、羽田氏（中を書二部）軍を引き、三合住宅を見（中をし）しるし、父を（中を）移せし一百円借り、海老沢話（一五）、夜一〇。

二日　ところ、十六日宮内、碧堂より一〇円。衣類して帰る。

三日　碧堂、鉄長の消息へ一日ずつ、何のなし。夜外会の学人来市地一三〇〇分せる。父より二見宅様。

四日　碧堂　三十冊はい秘既す。京知之社会長ひとと如と山崎忠の話。ノート宮（ゆ二〇円。主を、外田、南風書房へ受取り。

五日　碧堂、雨、事なし、（六）なし。夕方来立ち寄る（八五×五）。

六日　山近来の分。汽車のすぐ電車にて九、三〇ゆく。母の分取り

七日　碧堂、芋にて大雨。[illegible]島氏訪ねし帰宅と、服部を（中を）夕飯を（二四・〇）買ひ、

八日　会計借り保管して帰宅。日高中を井伊夫る二人なしと。中井より連絡地にて。書、地位りて遺業の紙ゆく。帰れば中井より二、三。

九日　出ない様。[illegible]水法の接続、中田来再刊。

十日　夕。碧堂にて図書館のこと。

十一日　二、三〇文部部（接始すしとてゆく。養活れ（中を羽田の部）

十二日　出すやうやう（ゆ出すと。服部にゆきて、を他にして帰り

十三日　夕飯後にして保田訪ねしに留守、一九、五五にて服部帰る。

十四日　来去、明日まを、斎藤吉郎「改鳩」のを、「新を」よりハガキ回答。

十五日　（ゆ）家居、伯母抵抗、文部秘「を宗」。羽田（鳴尾）新を」へハガキ。

十六日　碧堂、鉄長の消息へ一日ずつ、何のなし。夜外会の学人来市地一三〇〇分せる。父より二見宅様。

十七日　碧堂　三十冊はい秘既す。京知之社会長ひとと如と山崎忠の話。ノート宮（ゆ二〇円。主を、外田、南風書房へ受取り。

十八日　碧堂、雨、事なし、（六）なし。夕方来立ち寄る（八五×五）。

十九日　山近来の分。汽車のすぐ電車にて九、三〇ゆく。母の分取り

二十日　碧堂、芋にて大雨。[illegible]島氏訪ねし帰宅と、服部を（中を）夕飯を（二四・〇）買ひ、

二十一日　会計借り保管して帰宅。日高中を井伊夫る二人なしと。中井より連絡地にて。書、地位りて遺業の紙ゆく。帰れば中井より二、三。

二十二日　出ない様。[illegible]水法の接続、中田来再刊。

二十三日　夕。碧堂にて図書館のこと。

二十四日　二、三〇文部部（接始すしとてゆく。養活れ（中を羽田の部）

二十五日　出すやうやう（ゆ出すと。服部にゆきて、を他にして帰り

二十六日　夕飯後にして保田訪ねしに留守、一九、五五にて服部帰る。

二十七日　来去、明日まを、斎藤吉郎「改鳩」のを、「新を」よりハガキ回答。

二十八日　（ゆ）家居、伯母抵抗、文部秘「を宗」。羽田（鳴尾）新を」へハガキ。

二十九日　碧堂、鉄長の消息へ一日ずつ、何のなし。夜外会の学人来市地一三〇〇分せる。父より二見宅様。

三十日　碧堂　三十冊はい秘既す。京知之社会長ひとと如と山崎忠の話。ノート宮（ゆ二〇円。主を、外田、南風書房へ受取り。

九月十日 煙霧。夕八つ半すぎて不性、帰って南京で金鶴十三円買う。俗を訪ね芋ごはんを食べて帰る。十吉来たる。

十一日 曇霧。姉に葡萄を送る。言語学の会。世話する人が来る。坪井への旨書く。宮崎九十二円と。

十二日 曇霧。研究室会。年報作る。夕べ二〇〇の電話。南京へ。

十三日 雨。午後授業会。芋食べ。時事通信社の「そば」へ行くと「蕎麦」の話。一三〇日餞。青年学校。

十四日 朝、床の中で「僕の如」を手のため書く。雨のため出せし旧部ハガキ、「切抜」一号来る。ラジオの「切抜」考を書くこと。父井戸来る。眠りしに知れず。夜にストイ。ストイ「言語の国人」。

十五日 九〇〇起床。なまず諸と南瓜送り来る。一〇〇〇朝食。雨のため大いに降りて全部行かしめず。羽田家へ二一、三〇着。ハガキ数一八〇日ごと。父に「百合」と。「松茸」十二円と。元金。夜。

十六日 午後に雨降りて二二〇〇帰る。入しめの内にて寒し。

十七日 午後にて掃除。部屋は父井戸。

九月十七日 雪霧。午後に雨降りて明日上京と。夜後。

十八日 一日曇霧。雨夕方あり。ラオス辞典。柳橋なし。

十九日 三浦文部、帰国後来人。七年ぶり。有楽の上等。

二十日 服部と午後訪ねる。雨。

二十一日 服部の方まで。夜疲れ。

中元の祭りに入りし安田君、樟蔭女学に行くと接待に来る。跡八時。

九月二十六日（日）白鳥御宅、正嘉秀樹、竹内好、杉浦に八時半「嬉」へ行く。夕方より汽車にて奈良に中を孝指「感謝歸信新」（三〇〇）買ひ、埴井を訪ねしに三井君四條畷中へ行きたと。二二〇〇に帰る

二十七日 出勤、畑を耕す。午後大地書房の後田君来り、（三井君に送る）新報酬十月二十九日いただいた一等命令を。後田君と話しつゝ家へ中を下駄ばいて夕飯食はした。

二十八日（秋季皇霊祭）和田を訪ねしに什のは来ずとハガキせしと。三合仮賃借りとる。安田氏、八日ごろ、二六ごろ、取給とのこと。

（この後三行ほど抹消）

移転茶みて伏見の「三安」借りて帰れば食に和田、入るを待ちて和田君（徒兄と）と入合しある。書飯後雷鳴（三〇）うん（一〇）そうせしてより帰り来る。「新風」八、九月号来。留守中、徒中の山下君加賀山前後して来りしと。

二十九日 雨、徒部にて展覧会、和田のハガキ来る。「三合仮賃」引合せしもの。

三十日 午後聖殿、徒長ら二十名帰りと。竹内氏。風邪気味。服部正敏来ハガキ、午前中伝蔵（三浦に来し、帯を直隣坂金動の妻と）来りしと。山で色試いんのキ。徒長の好果也卵を送りと。服部正敏来ハガキ

十月一日 雨、休む。三合仮賃引合せ。

九月二十九日 到、雨、休む。書寝了。時事直伝社来りの受取り。疥癬と云ふ病名なれど苦し。埴井君来ハガキ。ことがース辞典（堺内氏一）送る。

三十日 出勤、書一冊大掃除。休み中寺島氏来りと。午後日和佐氏会へ中さんすい帰りと。服部を訪ね移転し埴井へつれ帰る。大地書房の後田君来り電報「聊」のくれと。和田より電話。明日来られ

十月一日 出勤、畑に人参蒔く。退勤又は前に伝て敏の後ろ行き左の所記の新田君来り「子供の国」に出一等、十日あてと。ほかのを仕方書く気とうし。十分に講演ないと中村君来り、十分に伊賀上野へ家と。夜入浴。

二日 出勤事なし。品々書を始む。

三日 早朝より腹痛と。疥癬ひし。この後ちゃくて前の。松竹美毋ちゃかキ、九月一、入浴せしゐる忙しく食はずと。夜入浴。

四日 雨、登校、行かず不快。（皆欠）を断る。

五日 晴、一三〇和田来る。館内を案内し、喜源氏に紹介せしに出版話と。埴井に伊賀米二斗、蕎一冊をもて帰らしむ。

六日（日） 京都へ一三〇〇の汽車にゆき、一六〇〇着。父母と夕食し泊午前中に地書房へ郵送ことと。食見ず聊書房とうまくて帰る。父に北海、土産にもらゆきし柿は父食へ不と、そうなる。

七日 出勤、不快なし。帰宅、妻女ら秋田に行きと。山崎加人接待食べ。

同下旬の手紙せるを早朝と。「子供の国」のために書く。

十月八日 「子供の国」へ送る。仕事誠ならず手紙、十一月号出まると。明郵の家へ十円、原稿用紙三。松ちゃん下駄せる。

九日 蒲生氏郷を書いたと思ふ。神戸「子供の新聞」まる。出版部松山氏と来る。夜東京のちゃんと迄送る。この仕事と信ず。国と。保ちと同家と。

十日 寄永館長、病気とは絶縁すべし。題名へと。同山書房より一五。正月号論文を八イネをくれと。塩谷の指図。夜保田家へ。父君と話す。保は帰りの方を長脇氏の社師事り、林房雄、竜井と三人と新しく友達会をこしらへり。大地書房より電報。

十一日 雨。タバコ八円に寄ふ、明免録書ぬを書く。「弱死」の準備は後る。角山書房より塩谷の分、中村地平多作、杉浦氏会の前もと。九州の雑誌十一月十日までに記一と。山久保氏人多。新聞はるしか信州へ帰りあると、喜ぶ、長男ならせしと。大阪書房、浅田君、九州書房へ入りきく。

その上あるまゝみ遠ヶ先こるんと思ひてゐるもつまんけるもし勤少しなほしもへどかへ（らんとおもひあるところ）のあることはこはず

十二日 続る。午後田舎せずして全中の国を三度に（ちゃん三十三円）と会を多数ひ記に命を人に借る。金井君と話し明に帰らずして帰る。改造一夫、相山さん人のキ、太平の特報一三円はず。

十三日 （日）病ホ上下痛し一日床に寄、書斎客、名古屋、明郵に送稿依頼せし。保の知人。山久保氏人手紙、塩谷人、角山書房へ入キ。

十四日 下痛と水夜ちゃん困る。がんファレ明日うかが。仕事九日。ちゃ二冊来る。

十五日 出勤、母は平はゐ上神宮の掌と午後休み、明郵を訪ね二十円返却。帰れば大地書房浅田君ちゃん電報。

十六日 出勤、紀元未書房稿金（はち手紙三。送ります、今後毎月これに送ると。書物の貴行長しと。午後指除。下痛ゆ。

十七日 弱死書のおして二報る（はち人ゆき、殺二、録之）。こん夜の見法をみとつ主。ゆゑ「は心痛しゆ」とちゃんと。ゆつしたを主。ゆの注小ぢちうちゆの教い用明るとちゃんと。

（神奇人ちゃん送りして、十月七は母の人命はと。）

十八日 終りまれど日点をて出勤、「弱死」の文語書をし終る。帰れば父ちゃ手紙、母の命ちゃの話ちゃ。

十九日 図書設南館十六周年記念日、けしゆ手振を見て殿ん上る。茶会後、書食、一三、三。ちゃ「弱死」の準備、大吉の国と会を多数ひ記に命を人に借る。金井君と話し明に帰らずして帰る。改造一夫、相山さん人のキ、太平の特報一三円はず。

二十日 （日）病ホ上下痛し一日床に寄、書斎客、名古屋、明郵に送稿依頼せし。保の知人。山久保氏人手紙、塩谷人、角山書房へ入キ。

二十一日 出勤、母は平はゐ上神宮の掌と午後休み、明郵を訪ね二十円返却。帰れば大地書房浅田君ちゃん電報。

二十二日 出勤、紀元未書房稿金（はち手紙三。送ります、今後毎月これに送ると。書物の貴行長しと。午後指除。下痛ゆ。

二十三日 弱死書のおして二報る（はち人ゆき、殺二、録之）。こん夜の見法をみとつ主。ゆゑ「は心痛しゆ」とちゃんと。ゆつしたを主。ゆの注小ぢちうちゆの教い用明るとちゃんと。

（神奇人ちゃん送りして、十月七は母の人命はと。）

二十四日 終りまれど日点をて出勤、「弱死」の文語書をし終る。帰れば父ちゃ手紙、母の命ちゃの話ちゃ。

二十五日 図書設南館十六周年記念日、けしゆ手振を見て殿ん上る。茶会後、書食、一三、三。ちゃ「弱死」の準備、大吉の国と会を多数ひ記に命を人に借る。金井君と話し明に帰らずして帰る。改造一夫、相山さん人のキ、太平の特報一三円はず。明日一五、三。パーカー来る。母、帰り命せる。帰り

れ大島郎、夕食後保田氏展覧会図録を出す。二十三日保田氏
に来らる。大方ならず、本二冊送りしと。三合位見了あり、代て本書
角方の十ヵ程を五六日遅れると。

十月十九日 愛子の柩迄にて、午後居残りて一五・三〇発車。第のパーカー付きし
れ来らず。服部宅へ寄り一九・〇七の汽車にて帰る。古野清人、昨
日の講演面白かりしと。「御食事へ誘ひ「大和国原」送る。

二十日(日) 九・〇〇まで眠り、三合せしのみ。夜室井君来り府立工芸へ話決定と。

二十一日 出勤、明日より土曜まで紀要大学にて休みと。タイプにて東京への寄
書の紐包。服部と駅まで帰り、東京部へゆく。

二十二日 東京部にて泊り、九・〇〇散発(六・〇〇)し、羽田を訪ね、三合位見返
却、メリヤス布一着女子に(一三)。一二・〇〇退去、宮家へ寄りしから、田舎一ゆき
學文堂にて、ルコポーター子郵訳と三合位見(五〇)と買ふ。バター半斤
(五〇)松茸百匁(三〇)、冷麺(五)とい円余をはなくなる。電車
延着にて帰れば一七・〇〇頃。斎藤君より八ケ年。大阪より電報。

二十三日 一三・〇〇の汽車にて保田と覚鑁展覧会と書庫を見す。イエキ一瓶(九)
買ひ、代て本書房と大阪書房へ返信。

二十四日 一六・三七の汽車にて服部を訪ひしも留守。蒲団とりて帰る。夜保田家より
野菜貰ふ。

二十五日 早く送別会、吉田君遊戯世界と。書上げ服部老人来る。服部会
合ひ食家へ帰りしと。一六・二〇帰る。蛍老人より蛍見宜しと。

大和通信書けと。柏井君より徳と本かん、外務省より五〇。岩れし
を。前田博士への挿ひ完てしと。母屋の大垣へゆきしと。

二十六日 蘇東坡書もてあり。大へんかり。一三・〇〇丹波市へゆき寺島氏
に会ふ。帰途楳本まで、共々中島明子氏に会ふ。一八九一六部
隊三坂隊なる中島より来たる便りなく、又と同じ隊に在りし人より書ん
手紙は中島は電波探知機の隊にあり、二十七年一月ルソン島マニラ
より撤退、六月頃よりイハ山地にて食糧難となり斃れて部隊
解散と。柿三ケ寄せ一ケ添えて帰る。山田君より三〇〇円
妻子へ贈ると。

二十七日(日) けふ聖林寺にて保田亀井の講演ありとて行かんと思ひしも止
む。信子を連れて田原へゆき遅く帰る。

二十八日 出勤、東京部の寺島氏来り会ひ、十月九日東京に出張とまで
る。大駒氏より新報語にて送ると。羽田の人が来る。新聞九月分
来る。

二十九日 出勤、芋掘りしのみ。山崎君、寺島に一五〇円お給(九〇円)。
服部家にゆき油のこりたる。風邪にてサイレンタイの精粉を
もらって。一八・三〇帰り入浴。大方東方文化学院目録とする
那文字史第二冊送り来る。羽田より後ちんが

三十日 出勤、芋掘り終る。日本伝説会へ寺島氏訪ひしに会ふ。見に
会ひ難く去して帰る／女性民謡の記念撰集なる話もなく、研究
所を去り、来せ。

十月廿一日 出勤、大学院答、茅会ひ、雨ふり来て帰途、養徳社へ中里「夜半
の寝覚」見了。亀井と荻山と吟ら保田へ質ふしと。明日を約定
し亀井来ると。杉浦来らんかな。

十一月一日 休みて鉛筆を山崎君と求め出張、今朝やり、姉崎博士を訪ひ議決ナ
す。杉浦来る。三日桜井へ来ると。帰れば斎藤君も訪ね来りしも、
保田宅へ中を伴ひ帰る。筒井君訪ね来、大地書房より「聊斎」
委託しと速達、角川源義より「大和道行」かけと、十二日までと、
速達。

二日 日出でて斎藤を伴ひて登館、服部を呼ぶ。満洲引揚の先輩茅野氏（山口氏）
（奉天医大予科教授）来る。文部氏来る。古鈴清人の川久保の息と云ふ。
「人間」より詩十三日までにと、「日本詩任」より十三篇を十日までにと。

三日（日） 静安学社の大会登館、一〇・〇〇石浜先、吉永（兄）陶大教授ら十名
来る。中村、杉浦と昼食後、史学者論の士あるし。一四・〇〇退出去、杉
浦中村二君と話し、桜井は杉浦を伴ひ二・〇〇の汽車出発せしむ。服部
来て夕食後帰る。保田宅は中里二・〇〇帰宅、本のこと話す。いやな
らつつ止めてくれよとしと。

四日 登館。館長ら仙台へ村岡典嗣の葬儀に行くと。杉浦書一まで
るて急仕事ヶ書き直し、館長郵便へ、「梓吉妃よりオペトラ」
批評。雨。混血（パプアで6人）女妻馬来語訳せしめ言ふ十あん
り。読書会へしと。玄堵先生ケの以横説る。

五日 登館、永井四人を叱らる、中村君「伊藤仁斎」と「懐徳館」踏
はる。有餘の本とす。午後文化会第一回。京都の新聞記者ん
館内を見せる。「定本宝」より二十日までに詩。江口三五段より十人て
弁護士開業と。木村栄子、新潟移つとめと、みるまつすら
同意する。保田家より辞業強ふしと。

六日 雨、正倉院へ行きしこととし、九州の書房へ「北方は無尽」送る。
「定本宝」へ諾の返事。保田より保田家んゆき来一升借る。

七日 来一升くれて登館、整理表十冊了。来日より八かき、伊丹
の阪神商業へ就職と。夜保田家へゆき 影山正治その他
二人と会ひ話し、聞く。二三・三〇帰る。

八日 登館、（汽車にて影山氏に会ふ、正倉院への途なり）文部事務官来訪し上野に叱らる、まで向ふあやまりてすみ
し。読書会、スマトラの話うまく出来ざらし、帰途養徳社
にも寄らんとせしが中村地平の女病床にありしとすてず、井伏
らし。南風書房より「經過」いかにと。夜夕食後、子以外呪
吐、木村氏の訪を受く。

九日 大、〇〇家を出、「人間」に「寓し」一篇」送り、電車にて京都へ一一・
三〇着く。今井祖母来たりしか、寺島平八郎氏を訪ね、聞けば北白
文次郎にありし 湖南先生の弟子、同行又その友と、乾吉氏はまま
郎図書館長、部津君の子姫京大にありと、昔は右方四十年の上皇
楢氏を訪ね、私書十五冊とりよって帰る。「…花園」は録

ラヲ、二十日迄ニ出ル筈ニテ（来ると、雨となりし）和田を訪ね
電話しなり。池内氏の命名「いめ」氏居る筈の処
たる。二、三。出去。建帰る。

十一月
十日（日）休校中なれども、出ずと定めしが、一、〇。校
国語教師を筆記に全日勤、りく和田、母のみとなり来り、遅
後仙和和田来る。宮口氏は外第三日十三日迄ケ、三島
住まる。花本氏女勤め、田中二年生の父義氏を儀なと。
三味線音会なしの夕ハイカイ会にて帰る。ハイカイ、医師、保
田氏の能。新山氏より移し三。円と鶏肉と野菜と保田くれ
九州（酒豚食ひい行くかるや、表田氏、その下のを頼む。
十一日
ハイカイ、八冊と写経、午後全日一階の構造変化の開始。尚
以上を敬子「安程」に沈一第十五日なりなり。
十二日
ハイカイ、九冊と写経、杉浦帰来、「楽我等ゆ」書く。甚伝和いゆを
和氏中和地平を知るなん書く。
十三日
欠勤、東田書く、二十枚住。保田家へ行く。
十四日
出勤、一四、三。ラ服部を訪ね保持久しぶりにて。
十五日
出勤、午後掃除、「柳橋」ラ。
十六日
出勤、末摘花の論議ア、午後、西田君と奈良（ゆき、ゆんて前川伝ちと
姉、二十日ラてなしと、中谷氏破行州に来と、西田君より数給ア「サビ和
ル僧（一〇）買よ。四日、おるの後、三国氏と香典五。

十七日
（日）朝ラおるんて坊主人の三日忌、午後蓋屋の待合式、ありて
ラ住んと三膳鈴ム、柳橋住。蘇を城出しみもしの
ク勤、海南島の蘇を城」三十五枚ほどとり、定時定への
話とれん連達ア。保田いゆを、安全剃刀の刃五枚（七、〇）買
て帰る。お寺ラお住物鈴はる。夜本和野氏来。
五へ八ヵ中。
十八日
出勤、八四、本和氏ラ話ラ多夜。「ラ住の国」ラ読む。ハートしい
て「アラヒヤレナイト注氏。
「注」
三十日
出勤、米一升もらひ、そして仙田氏欠勤。クラウスの「Anthologie」完了。
二十ラ
出勤、砧美名来ラ多ヘラ五十ラ。ラる、三三ヶ中ハ上まと。寺島氏来
る、聖書三千円ハ色ケラと富永氏の話。三和書店来ラ、ま
命ハ住氏と、和田氏病気、後半年の命とハはるると。亀井氏、
奇妙ラ古印ラ田、「香雲」ラ来る。
三十六日
出勤、ま住伯来欲と、羊羹ハしらん。天外支那語三年住木生なる
の安田君ラ報ラて来る。和田氏（お足舞、俸給七五〇円とる。
（十家族千ラ三四〇円）
三十三日（新学年）絵ラ無為
上左一袋八〇円、左瓶二〇円。
三月
（日）朝、出ル（ゆく）情本位刀坊和人の中谷ラ来て計調査書ケ
と。「午後写経A記し、帰りしラ古郷氏宅（ゆき中谷両徒
兄弟と刀坊和人の住の設計いか（らる。不快不安ハ論
ラし。

二十五日 京都の中島氏よりの来るを待つもあらず、稀書目録二冊、支那文化廿冊とらる。下駄、三足買ふ(一二〇・〇)前川氏へ「京橋」[illegible](八月分)。帰れば角川氏より「物語と語り物」来たり。

二十六日 出勤、丹波市「学生の家」へ申込みたれば引揚者の為ならず、館長は途中で会ふ。京都へ明日中と、バイブル十五冊三五〇〇とせまりしと。蒼隆社の比嘉女史を亜の古代文化」かけてもらひ、日和佐分会へ出しも会へず、図書館にて「宗教思想」に十篇追加す(計十三篇)。夜、安藤氏を訪ね、新羊報出せしも中谷両氏兄弟気が要らしと聞く。引揚者二名来り、いろく話す。けふは不快ならず。千本加合せてもらひて二二〇〇。帰る。

二十七日 出勤して買入れのこんで会計事務所で「長根歌」なり。未定、三五〇〇円もちて京都へ出て三條へ出て煙草買ふ(二十円)。朝日ふ句ん寄りし吉村支局長旅行中と、中島氏を訪ね書一包し支へ寄る。橋梧朗氏を訪ねて会見し「清文堂書店」補遺を贈る。ウスキ氏へ寄りしに旅行中、臨川へ出て清文二冊つくらで貰ふか、内へは四五十日づつと、慶長助版本未定の旨つたへ、羽田宅へ出て、回教書目かへし二十日もらひ、夕飯よばれて帰る。桜井着二二・〇〇すぎる。

蘇洵「嘉祐集」(十六日)買ふ

東方文化(中村氏蔵)松井上二氏とも帰郷中、吉川幸次郎氏へ会ふ、ネルヴァール[illegible]。明代の本買へと。宋越志要りしと。

十一月
二十八日 出勤、疲れてA十日より今よみしのみ、南部銀行へ書籍後ゆき七四五円もらふ。羽田のトンコ語バイブル二五〇円位にて売るよし。八木女史へ三〇日かへす。下駄の白井報引揚者ら二本買ふ(十二円)。帰りの汽車中にて郡山中学の秋永政吉氏を挨拶する。下車の先生にて先日の講演をへしと、柳田様住む。南風書房より[illegible]

鶴書堂郵にて、角川源義氏へハガキ。みち子原稿の事也。

二十九日 出勤、堂井君来りて話す。高田女史の娘一氏より、胡蝶園の話

十二月十日まで休

三十日 大掃除、午後服部を訪ね帰る、疲れし、一九、〇九の汽車にて帰宅

十二月一日(日) 無為、雨。鶴と柿子(ア人ミ)無償配給、炭五〇・〇俵(二六〇)。

二日 直勤、昨日一日寝て倉ひしあの胃悪し。

三日 直勤、午後文化会、新井氏「中国丹版の話」。南風書房より電報、蘇東坡承知とならん、不二出版社より約くれと速達(二十四日出)。

四日 朝の汽車にて遅れ、一三・〇〇に来る。仙田氏に十一至二十(一六〇)もちゆきしのみ。安田幸生氏、不二出版社へハガキ。

五日 寒し、一昨日より外套、手套。無為。木村氏よりハガキ。

六日 直勤、前栽足へ紹介状書く。書店社より[illegible]の世話がへん来る。前川氏より[illegible]。高田女史の詩書く、出まず。「太平」

十一日より「鐘の鳴る」のれるを見る。

七日 出勤、アメリカ人来るとてハイカラの陳列せしめらる。朝、部長帰郷中とて
午後部会なし。米人二十名ほど来り中山部長以下接待す。（朝
大島郎の兄弟の某郎来り新内に紹介さる。新川氏に会ふの也）
帰りは川崎・菅・松本連違、明日夕食会と。夏目君乃女史ら
不二出版社の女子従業員ら話ると。住田を夕食会へ誘ひしが
きしも行かずと。

八日（日）七時五〇の下りにて大阪（中崎、一〇、三〇）山本治郎宅へ着く。川崎
菅・松本・真と四人にての接待。山田償夫（大阪地方判事）、後
藤孝夫（大朝整理部）田村二郎（阪大理科事務員）、鎌田
正義（日銀大阪支店）等次々に来る。本社から来、住職勝也
おくれて来る、牛肉をめんたんに食はせし、山本は国立武部隊
にて定務に居しと。（一六、〇〇辞去、一九、〇〇帰宅。

九日 寒し、九〇〇出て高田にて高女の堀内氏訪ねん。授業中、「大和の夜
明け」託し、大鉄を経て天理に行く、両者包し大和意し。図書館に着
きしは一三、〇〇、その間地蔵目録の出版すすて中村君の説通りて大目
録とすべしと。一四、〇〇より茶会。帰途大島郎に挨拶す。池田ら帰ん
座談会すべしと。大阪「ストレンジ民族」云ふと。

十日 大風、寒し、出勤。思ひ一念め由中陳話田君（一二）来一升（一三五）
呈四一升（四〇）買ひ来す。「日家にて無為、会なし。

十一日 出勤、新井さし女史に帰田会合く服部帰り来る。ペン 十二

月号来る。夏目君たかの女史へ分かち書く。

十二日 出勤、鎌田君出勤、西岡君同書記、山崎君事務室、前川老古家
堂、山崎君贈る。日蘭辞典らは出せ会。

十三日 出勤、大正記中某社経理氏の初出勤、義勇隊の総督たらしと。午
後読書会。笠井君来りて落給して大阪に至るも、練止す。夜
住田のところへ行きて話す。池田らいかき。

十四日 出勤、土佐中三服部にて帰橋てんとおさらし秋月、誉依
社、大和タイムスとかいふ新聞。探求の極楽するへゆき中島のを訊
ねしも消息なしと。辞してて帰る。奈良の田安は前年来て「白珠」て

十五日（日） マイルズの記「しゃいうっト・ウン・アトラス」よむ。堀川氏へ手信、お（幸）備
母さんと包。昨日来りし松井君の所へでは復員婦人工場を可嘆。

十六日 出勤、此岡君廿餘のを調め。午後で掃除、おーきのさん九五〇円当
め。七月手給以来の新政券。妻を訪ひ伝えの書物「（八〇〇）買
ふ。夜入浴。

十七日 寒し、大根八貫（四〇）買ひしと。西川英夫君いかき。

十八日 八、〇〇の汽車にのり遅れ、一〇、〇〇出勤。一八、三〇より引揚者の会、木
工の人たちん援護金貸すまで、とまる。機関車時備んともん、直
勤に不便とならんと。憤然。「四部備要」の三蘇の部五冊借出す。

十九日 出勤、寒し。和田先生すいかき、遺稿を廃しなるかとら死せしゆ、大
学同窓会名簿調査表。

十二月二十日 出勤途上、汽車一時間ほど停車、なお仕事をしたり、クリスマスの祝日和了

業務出了。不二陽社より「カメ公雲」買いと。お婆さんの鑑証

明書届く。

二十一日 四三。強震、お寺の塀倒る、墓石倒る。なお西部ラジオ、汽車いのり

おかめ電話不通のため天候不良なり、モ気よくて稽古多し、三輪の芝

居の陸象全壊、幾日、昨日、朝和子母泳手、銀座みゆき座

陸象し手伝ってすみ、俳優七人の内、山の登坂と称し、大和多

イムズ、私いやそれ中に手伝弱男にて先正月号のための初らし、

二十三日 昨夜すでに、服部先生いやしい一家引越、それより引越すとき

山のない再会、仕宮の掃部治所いやそ後、神保町と同級と。

二十四日 ○○すでに辞去、増田伯、掃井ん仕壊寺近くの三軒の内二軒

ずつ入るとと。

二十五日 (日) 寄るべきなりハのキ、九州故郷にて新婚を知る、思はいやそ

大至、そら豆買い来る(三五〇)。大至一斤四〇円×5、そら豆四〇円、特醤油二

合(六×2)。客さし、無為。

二十六日 ラジオ会と、注ないう屋十五年ぶりに、本病物阻にて入院新聞、や

ばい中山内閣名のための多数のう閣会と、西日の天、帰うんとしも寄結重

屋の家にて昼食もらい、陳列館る。いつと見えして知つ、午後のすて後ろ

り、八木、さに言の女のみ酒えいと思く、いつ左手ひ中二〇〇〇まへ

過去。なお井と手大仕、新聞に定こ。

十二月二十日 晴。依頼の張紙、始末をやり葬式改書きそこ、八板。国家ラジオの

一〇日場出、すぐ。

二十五日 雲、大和タイムズの新年号の

大和 元旦

やすの辺いうすあかりせし

松の木のこずえあからむ

とのそとんにはとりはるを

のどかなるはるぞ来れる

よしの(くに)みるばからと

あつまりてよろこぶ(とし)しも

けさ(はる)より(はる)と古かくうたへる。

午後丹以東へとうきゆや治氏ないみん

し、服部しやきしも夫婦とし留守、金井

貴之助と前載いやを新聞せしい八日!

引越して長板橋ぜ光き汽車ある、二

口三〇円(五人)八かキ二〇枚買物す。

二十七日 俗ひ気分すと思ひ千葉

(ひ七(三〇)と夕かつ五十七(五〇)とを

しらて文部(やく、父の代へなしん

俗ひと同じく風邪にて二〇日宿休と、大なまるこ二〇日ラジオ来

れり、去年大正にて四調と、我一家私井の四畳半にて。金長之湖

内之夜休父ん後事地せそ、母日を訪ひい数新んやしと一五、〇〇す

もまい紙ち、金の、孫印無事の金割りすと。一七、〇〇ひろまた女の

とこらいやけれたのすくすまる事、一七、三〇父のつりたとそ人ら金事、

なまるな帰りし上帰に一之多隅蔵、四之そなん人冊と「科学」(雪

山手宝)をもち大銀しそて帰金のつく、八木以遠の知合雪

ら、垂廷おり、十月日の雪くじ当ると男と同車、特井いて紙

用うどん金へ以一〇円と、七時へ一酒とてみん三五五日神のあり。

十月
二十七

東京より路医の饗宴あり。一七二日と杉森久英の「近衛」の印税報、一月三十日のものと、場所氏一の部分を同じ和みる。

二十八日

晴、風吹く。近事如意、伊四郎にまた一升瓶一を借る。大豆二斗と引換への情況は独裁中の農業会（今は去婦人）氏いわくとしい役場へゆく、後いて十八（故松二〇）の濃厚と丈きまりてあり。買物四五円（一四）、竹輪二〇（三〇）、キャラメル一箱（一〇）。お寺へ餅おれい給金月、餅は。杉森の話のかわり、同じ嬉しい重ねせしも不在。

二十九日

曇、不二出版社（八〇）、一七二月の為替より、お寺へ餅つかれい給金月、買物こんいやく三枚（一〇）、のり佃煮二〇g（二二）、はし十（三）おもち夜一〇枚（三）、配給米三斗三合（一八〇）たばこ正月物配（二四五）、つを色いも、しんしょう屋し、餅もしの正月もち、醤油一升とりかえてもらう。去婦明日乙番と来る。パンとカリケン新一四三〇〇あしらやく、四の二時頃来る。柿一樽（一〇）もち粉球代（五〇）ちり（五〇）。炊事と一緒にて忙しかりし、夜お寺一歳誕生祝うこんて一〇日と下駄一足（三〇）もらやく。

三十日

伊四郎より電話、明日書けども、帰り陣の代

十月三十一日

買物いち

十私買い（一〇）、木村医院（若干の往復）、帰って書斎整頓一〇。

夕（三五）こんいやく三枚（一〇）、天林一束（一三）、酒五合配給（一八）菜ものと昆布（二一）書斎後伊四郎へ行き木村五平宅にて松明買い（一〇）、木村医院（は明朝の点滴なり、炊事し、陣の話。陣より近所の豆腐（五）、夜明朝まで、デイルタイの夜書伊四郎へ行くと勝手なる買い。

十月三十一日

朝炊事後悠紀子木村先生に診やしく異状なし。射三郎と葉と餅ばる、ようい林買い保四郎へ行き餅一七〇ケでいろまるまるおらんキャラメル二箱を伊四郎と話して帰る。明日を理外路の葬式和郎のものもの。

そのもしの。市へ麩（一三）松茸一〇g（三〇）買い、五合配給の仕（一七、二〇）買い正月の用意とする、味噌（二一五）と酢（二五〇）の配給あり。ケーキ餅屋に、明日の松茸の用意し、夜和郎宅（台湾会）と電話。

二十二日

すすし鈴を炊き宮城神宮、家族に拝礼せしめ、ようやく多数ゆく、我ひるの中、なるべく仮ピパー着く、筒井より明日来ると電話、書面付と両、事なし。「大和タイムス」をしんぶんを不かり遠ゆむ。

二日

量、朝寿宅へ行くとそしんやをみせる。おまるの仕ん十円つ、お年玉物なる。一〇三〇。筒井書、夜報。去婦市役所へ一二〇〇円送せる。

三木氏来られ住宅係と会合知らる起せしと。まもなく中止来り流れ。
宅その他の歌ひ一小来り、つまらぬ。明日多人のキ三氏伝記の双書んで
ゐると入ると。小林俊夫手紙「私かてんなスかと」、三江師塩ち、中野氏
来る一帰りると。昨日長いんをかんこ手紙を二十枚(二八)葉る
(もなか)(一)。(五、他二十一)。夜明日、小林、井(浩)婦ら来(四)(私)の
唱歌を伝ふんでやるしかなこまいのうしと)へ返来。山崎(同窓会
の)返事もなし。

一月三日 年れんかえとする中、[illegible]
病臥と、吉野氏に立寄り伝出しの印押す、会計係と記入し来る。保田
いを仏伝伝陸の室ア室をとる。[illegible]。
物欲いすと初耳。田九州訪人。

四日 けのの書ゐ伝ひなかすやらしむ久振りの快晴、客相(三〇)
食ひる中、宮子婦人「年末堂ゑ三七五(律給年月人)出来
る。書食は大書食屋ゑ。日をかゑまる、とれい鳥
彌助れい行り、牛肉すき焼ず(肉一〇〇、豆五五、水菓一〇〇、麩一〇、昆
布伊五一五、こんにゃく一〇)やみ子ゐて菓ゑ二人二四三、客相
三〇の分(三〇)。柳田國男ゑよ、母もやゐろしと。十日帰居と。建
ゐまるゐまし周吉言之と「蒙古及蒙古人」の二冊。

五日 雨、伝ひよろしもらし、一日臥居して無為、午後婦婦迎出東
る、客相、俳、菓ゑ食はしれ。

一月六日 快晴、暖し、本城よみしのみ。夜電気故障と停電と続りて無為。
七日 曇、時々雨、坊ちん電気をなしをる。八ヶ食わのみ。
八日 曇、寒し、吉野夫人来る。本城書く。斎藤吉郎(内合せ。午後保田
いや芋焚ゑ。流車三〇とる、朝七五一のみ。
九日 日毛と去節、米ゑ来るライフ、エスクワイヤー誌来る、帰りの流車一七三三と
なし困る。安田幸生ゑ歌集、堀田氏一ゑ賀状。
十日 晴、朝の中伝ゑ君江の表紙(写生しゆく、美一世目(三五)、見等
(一世目二五)米五斗(三五)。水炊事ゑ多ず(キャうメん一〇)。四生ゑ
の反物新来る(三九)。夕八写ゑ(三〇ゑ二四)。午後本城書く。
十一日 雨、日毛去節、「ゑ伝の図」ゑ稿新一〇、奈良の荀国義氏なる詩人よ
り入かも。一六〇〇返去加部いゆく、中色宅(中のこと)。改造の稿宅午
後ゑ[illegible]ゐしと絶望か。帰りは杉浦ゑ手紙ゑ国の地震いて[illegible]
れしと。夜甘界、安田幸生ゑ[illegible]。
ゑ国ゑいて女詩ゑ一メ目三五と。
十二日 ふへ子眠、八三〇ゑ吉野氏で会と、やまゆやもしめしまゑか、一一〇〇
ゑれば紙食ゑ人来る。保田三〇日使ひしゑ[illegible]
ゑ一人入て三五〇〇は[illegible]引揚証明書必要ゑと。午後引
揚ゑ会ゑ書寝ず、本城書く、杉浦、新田武印、池
辺茂(ハかも、進路)へ「幸臣兄」書く。
十三日 流車ゑ運れ電ゑゆく、午後早引し二階ゑ和室場(中ゑ引揚証

明書、毎下附の件は、判明、明瞭と相違して帰り、古野氏へ話し
婦廉出張の件申合居れたのみとし、印頒く。三郎氏なるより古
野清人後来いるつもりと、一の。
一月十四日 出勤、寒し。アレト。ポイテイヤ一冊をくる。我不知。送れいやなり。区
役所経理組合中を古野氏始め皆と話せば、三和石こへ紀職の話あ
りと、古野氏（中は節長）「春日部社」を語る。
十五日 出勤、図書係をつく、「宋史通俗演義」借る。午後大掃除、
すみて知事邸へゆく、柳沢保恵伯事、五事後帰と、義風二部と
の他、中を又八ケ時帰れば、大和文学毎月の編
輯月人と。後日云ひとなり。三時頃金子画策と、出るなり。
十二時来るつもりなり。夜日本歌の中めくる。
十六日 中津川、十時出て中を。石山金へ引移証明毎下附中をもるしと
毋沢市の引移名簿と来四ととりて（せんせ）一の後、帰りん
然る古書店へ中印のを記る。村田治印の安藤の事
「ゆえ」買う（四、五）。帰りん古野氏いやを印と三津石住証明書と
を出す。
十七日 出勤、午後、憲書会、すみて歌かんなせんと、ことわりて変るなり。
十八日 出勤、長谷川氏来て伊を静岡のところ聞く。服部に多
りしんなお帰る。（天外の住所はなんと）。角りて堀と人の
「民をてる」。堀日民一、来る。不二出版社より帰人歌話や

めと。十年八雲寄がすとなしと。二時頃「オレヤ」。
十九日 晴、午前中時々雨降る。伝はみる坂（中を老三人見（三文字）
買て来る。午後同氏四子嬢来る。伊ん中を中山邸へ誘う、二月に行ろん
と。
二十日 晴、書一文字（大言の神日力と）。ろと来る。節長のところ（中と、大高
つ名落之。古先建男来帰迄ろ。帰る汽車は十之今あるる、新
山ろ不二、伊日のをの。
二十一日 出勤、仮死せし本和石ようる書勧、俸給八三とおーナス七五。とりる。小
幡居と貴を靴迄し一五、茶七五（百円）、うどん一（二杯）、ハル書と
古事記（山名治みな）と「なるる」とて四五、小幡石うどんと伊都ものり
見る。
二十二日 春画えんやくを一取止めと、寒し。山崎石出勤、妻石を給て古新山ろ
ず。お当宅来て今して宝教授の養金基ます。中山邸角也
二十三日 出勤、この頃八木吉日西女ようリード教よ。帰金中村石ん字「覚後
夜」借る。
二十四日 ろへ雪降る。出勤、ろけて弱と伊しせず。（汽車にてなるん歌紀のストイ長と
とやく安野氏ん会ん）。村義石ろいかず、汽は二三日ろ下、一文物
を一日来ないと。「午三時」来る、義長、「人世記書ん「辞を城」と
ろ石る。
二十五日 快晴、伊ん石、午後歌唱ろん掃除命しる、一四、三。

主任様より、留守中図書館女史来りし由。

一月二十六日(土) 雨、終日落ちつかず。無事。

二十七日 寒し。出勤、本坂一寸書く。

二十八日 出勤、寒し。夜、図書館女史来り相手をゆく。

二十九日 出勤、寒し、笠井依太君退職の挨拶に来りしも古野氏は会ず。
月給一倍半来るなると。

三十日 出勤、整理課の二百五十冊やらせる。富永氏「七知多子」の[illegible]で調
語了、一向はつまらず。帰れば「子供の国」来たる、一冊は一冊返り
し由。

三十一日 大掃除、すんで栄三郎氏の講義始まる、以て図書館紀要のこと。志
賀てもらう。大和よりスキー(中止)許可に会ひし忙しくて 新館を始
め、服部山中とし山名等、電話ありて帰る。電車中取帰り寂し、残りま
のセネストで図書館へ。帰りて久し振り入浴。杉浦さんがきて五十日
まで[illegible]始めしと。父さん五十二番地に移居と。

二月一日 出勤、(マクアーサー指令にてゼネスト禁止され、流車すまなし)館長保
田に言い来れ一かれを官長となりしと。書一会後、高橋君に示され激しく
の家(中く、男女(男は元[illegible]会 林夫人是達氏)にして来られ、紐子と
らひて帰る。丹は子持ち一時間の行程。夜保田さんに来られし、保田
老人の家(河内石日)へ中きて不在、父君財産税の申告。書かも
みる。しかく話して帰る。斎藤さんより千ばかり船橋出ずと書せ
の主也。大さき着と。夜来不寝ふて眠りがたかりし。

二月二日(日) 寒し、保田さんの電話ありしに来らず。一五〇〇掛ふれば大帰らずと。
館長の方へは断り出す。

三日 寒し、出勤、本坂書く人と也。
　上宮家の植木君来る、保田の弟
四日 子供ら、もと橿原神宮につきて。風強く、保田病気の由なる。

五日 風寒し。出勤三日目、保田さん帰る、三輪へ電話ありし、七世
方手紙、窃犯入院中のを話しまず。本坂お守返さず。

六日 晴、久し振り出勤、硲君一日から来りしと、安田喜氏の件批評くれる
よく本なと、ゆるくし。帰途竜谷寄れたる、三村諸方でとめる
由、大和文学のことし何なかいやまず。帰れば父さんから金尾鏡谷
氏廿八日(一月)逝去と、あと父やるとあり。保田帰りしと。

七日 晴、出勤の途、保田さんに寄りしに来ぬと起きず。中きて本整理やり、明日
宣郎出張を命じらる。八木吉田二女史らと始める。午後読書会
中村君の「鶴の渡せる橋」と吉田女史の保田氷心朗読。三村君来り
て挨拶す。「実の所」雑記の許可証中にて東洋叢書未定、「玄恋」
のをやりをると。[illegible] 帰途服部に寄り、楢橋七子。
大阪工芸の企画発表す。附属図書館となる由。夜保田さん
も父君と話す。吉野氏保良家人に叱られしと。保田十日か十一日
三輪へ来ると。

八日 宣郎出張、七五の発、丹波市一年端一三條 東方文化(つとしは十一時

「結婚」とは、「婚文書」「結婚合同」「婚」より、「婚文書」

吉川寺に行き、中氏に会い、井上氏に会い、外山氏に家相見と話し、
新聞三と話し、三和台に行き、方面に行く。一度父宅に寄し、
次に会い、夜帰宅すると、和田（中）と話し、帰りて父宅泊食。
父帰り、食後の話とばかりなし、夜不眠

九日（日）九〇〇出発、学校に寄り「清文論夢」（二〇）「清語捕物」（一〇）
「南海語録」（一〇〇）買い三時まで上京。途中切符西武線買い
買い、本にて降りて、八木の書房に寄り、一四三〇帰
宅、書食す。云ていては十時中に保田氏と電話する。
と。保田氏に中父君と話し、夕食、十時まで橋井の中に帝国
出す。丸食、夜食の後、夜来客、十時まで話す。
帰れと。まるまる過ぎの苦労多の日々。大地震多く聊有
過ぎると、宮崎の文代来訪する。話判二〇（一一八〇）大変まるまる
くん。子供の日ではなかったと。

十日　保田を誘いに行き切符買って来てやく。富士館に紹介、金井君
に保井氏の妻はなし、一〇〇〇分に卵いやく。弱き、疲れ来る。書一
飯と酒のしてそして節を我慢まるし。報告す。石の上よる
そのみ知らずもし、われか三十歳はすぎんとしし。石の上よるみ
ちをば（つゝ、ほ）よりうまいからの代をしなかった。一六〇〇帰宅、晩
保田に寄りて帰る。なまるの報知、医師「人間」「近路」「文
化学場」「近道」「海語」「保本」を井ヶ谷の中、芳野まで手紙。

「結婚式」「婚の姿」

一九〇〇ヶ谷野氏に中より「婚者の会」木工組合に行くとある。

二月十一日　紀元節、学校にて式行する。保田に中父君に五〇〇円の書食をく
封筒と書籍代は二割の利益と。保田と話して帰り、午後同じ
和子女子。雪しきりなり。

十二日　出勤、管理保田氏に感謝せし様子、書目作れと。服部宅（中）書く。図
書館の書第四三月末終職と。「中口文化」まで書依頼。

十三日　出勤、事なし。帰りに義依れいよる。「文化の国」へ「会ヶ谷」医よ。

十四日　帰りに文と館長ヶ谷、午後まで中みれとなる。

十五日　朝陽、一〇三〇まで、給見まで電話、神社ヶ谷上京と。義紙れへよ
り会う。中まで南国の母以来橋井国八ヶ谷（三〇〇）。中まで服部へ

十六日（日）朝中まで国家（中まで来三千借る。和歌大来る。君塚にて写四
〇円（六七三〇円）、大阪三番（十五日）買い来る。十九無為。

十七日　出勤、不快。

十八日　出勤、無為。夕方雪降る。朝汽車にて義（中）保田氏ヶ谷会
ひし。

十九日　朝、玄関に会の師秋嬢ゆるし。午後夕方雪降る。

二十日　出勤、夕方雪となる。

二十一日　出勤、雪降る。午前午後、杉林之芳、
長山光義文化研究会ヶ谷来。
二十二日　朝ヶ谷作業とし。義紙れへ「玄関」出来上がる。服部

いやましい帰郷と。帰京(ハカヘル)ハかすかるく来る。雄書房、砂美、杉森
銀座を経。今月給私金吉日と減る。
三月二十三日 (日) 国を知る事をつとめて来る。晴し。冬ぶりにて八洛、吉田文邸へ
華北吟二首書く。左吟一八。私(三分一也)。
二十四。晴、淋く寒し。午後に官五来り多くこれ相談る。金日お母さま三月二日
出蔵和文の一周忌なるゆえ出来る。
二十五日 出勤、昨日ならハ木嬢の退職とめしもきかず、帰宅日和佐私会
へゆく。夜を帰宅して出千日のこと。
二十六日 出勤、二日睡眠不足のための眠し、尾山にて西ゆ、午後富永氏の
工とせくるべかりの話つもり、吉田嬢と話しをゆら帰る。郵中の
私れ氏退放てるとて聴紀す、俱ロの之繁いと口上の高師等、
習生国をのこと、夜国が嬢来る。
二十七日 出勤、「進路」より沿の稽科三。(一四二)来る。大ラ口を吸を
知いやと。俱に(ゆそ)ゆ五(のち)殺る。大島師に会ひしに話
七ず、「進」路へ「芽の路」ナ日故を。夜を帰宅して五千日の
怪絶る。
二十八 出勤、駅にて井上嬢ゑれし吉田文絵うる。三月十五日来ないとゆる。
谷山彩之輔来る、神保芳彦る(洗)れしと。明日ラの幼稚園22書
の講習すみ、谷山、金井二君と帰る。私永氏に会ひ学行法陵を話
す。中の女教師のを絶ラ礼、水来る。一ヒ日安ん地せし也とおもし

也。
三月一日 朝から何ル世ラ、午後吉田嬢と芝に出、加和に寄、中村家を見弟と
話し、山洛のを聞く、「五法」くれし北村教授をまいること、楊雪
華を議とるしと、日を法使用取を止に国りし女学をストル「海和の出
唄」と、北原しらて帰る、女中が会社「ロヤ城」の話」の原を
字をしら「アカト辞典」の結大部分もつ。天現を清学会の時を
相談ラ。 藤村ラ女史宅にゆると(ア)「大和の芝居」ハ二書く如し。
二日(日) 八・〇〇電をして大阪「史鶴楼」一三五ラ一阪和浅香山、金日に着を
し以(一〇、三〇、郡田又也も来、北女の紹介のをとゆ相談事(今
中、三ラ、なて)、大ラを一名、「市役」ケの芸氏と談ラの姫渡
その外。法事ラみて間井来る、それにて上郷芸の田村いやは近社ない
もとの家とられ、カを家にうり住ひ、安子知らでりしやうみし、中文
の海寺にをしと。夕て郷五義弘を久米ゆに訪ね、夕飯駅を出ず、間
井と駅にて別れ、乗ることて帰れば二三、〇〇ラし。主ラ。ラ小中、若松書
義しを師と。
三日 出勤、海文書用をイ。にてみつ。八木嬢に大和塗料をやらうと
ます。近一升配給(四〇)。大ラ小中、なまにて内職てゆせと。
四日 出勤、午より海文書用おつ、八木氏やはり退職と。生駒薬品
ラつ大和ある」の相談に来る。左垂の衣と食」(一七・〇〇)買る。
面白し。

三月三日　出勤、なほて満之書簡のタイプ出る。午後四時をやまとゆうたくれる。八木吉は二嬢と散歩。夕食には、食べ出づるゆゑ。

六日　出勤、屠腹し。雨。午後は八木と私駒、澤井の二女と工和女子の話。十一日云ふ世界史れしと。夜間に女史芝居つれて来り三三。〇頃まで。

七日　出勤、なほて渡辺の貴重書やらる。西本白川「西書沢語」あり。岩村（こんくす主義のその断らるる。よべ不眠のため文意なし。立花ゆうきあり「分」「奈良、播井し」等よ。筒井、吉田之和子分かず。

八日　出勤、貴重書一冊さしよる。午後吉田君と二時間半明代中国年合せす。来人二名来る。貴重し来る。鈴木去人ゑし拙ゑ合よ。八木嬢医職の社内は婦人ゆ仏国ゑ合して未だ断らるゆとす。文化新聞ゑ而の結新三〇。筒井（八日）。

九日（日）午前中臥床、午後来客来る。国ゑ姉妹来会す。安形動ゆと。宮井仏之治事ゆ山内閣市ゑしと。山西堂を社ゆ姉ゑしと。教師として体々ゆゑらし。一九〇〇ゆ帰る。おゆゑ食腰痛。ケム一五〇日一日〜〜悪ゑし。

十日　下痢、出勤、寒し、於義之至ゑ不孝ゑ五、三日一ゆゑしと。

十一日　出勤、何ゆ出ず、夕八十五日とゆゑ出。菊芽の和十ケ入手。「前」来る、つやゆし。外ゆけよと停電、お婦仏合ゆゑ。日一〇給と。

三月十二日　雲、八木嬢休ゆ。帰途長谷川ゆを「主教」新ゆゑとる。なほ九日十四日ゆ之ケ月間の定期買ゆ（一三〇〇）、三割以上の値とゆゑ。

十三日　晴、八木嬢後藤の不幸と、山崎忠君去人死すと。服部正成ゆ八ケ千七既ゆゑひオンあり。書笠井君来る。

十四日　雲、曇し、午後婦書会ゆゑ、時間の無ゆつゆひゆゑ国ゑ。服部いゆを特殊二番さし良く。

十五日　出勤、八木君来る。大掃除後吉田君と三人にて話す、指ゑ給仏ゑ。「教」吉田君と今古ゆ歓よ。しゆ帰る。ケム長谷川ゆ結新ゆらゆ（報四吉日引二五四日）。煙草十七日とる。「長知教人」と「不二」二日ゆ。「食後の唄」。

十六日（月）「ゆ後の図」と結新（五〇）来る。国ゑ嬢来る。引揚吉の和給としよゆ。乙ゑ金と。保田（午後ゆ）ゑし風邪。物産ゆ〜〜高し。角山書店ゑ和ゆいゆや書く。

十七日　出勤、高山工和農園へ保田のゆ南瓜とまくゆ結果ゆいゆく。翌金銀せしん銀行機関ゆ山し、上ゑの書日宮し行つ。八木吉田君と話し帰途長谷川（宮ゆりしん三村ゑ）ゆゑ、なほ（ゆくと。流上ん祇ケゆ。保田之へ書ゆゑ結ゆゑ。和歌ゑ結ゆゑ礼状。

十八日　出勤、貴重書三部やられし、吉田八木二人ゑ話す。長谷川ゆゑ宮ゆ宮ゆゑ「神西西氏」と「和ゑ」ゆゑ。電話、昨夜多郎ゆゑ電話ゆしと。鈴木郎夏、小山正孝、高田正典へゆ返せと。

三月九日

なかいさんに電話をかけ、三村その他に電話をかけて会い会場をやはり堀之神西之へ（の手紙書）。ケガと部長会議にて来ず。八木吉田二氏と語る。サクラ2.5g分けてもらう（古五〇〇）。荒井平次郎来る。

二十日 出勤、部長三宮より三十名ばかりの休みと聞きびっくりしてよく手紙書き、午後会に出ず、すぐ墓荒けをし四番町、井田で三番勝つ。明日吉は八木二氏来る。夕方雨。

三十日（春季皇霊祭）九〇。吉田八木二氏来る。雨午後いきて晴る。三人にて家出し、木はま邸へ、父の家（中なし建物）同山（中そんすり上）と、新聞農林を見る（重）。乾電池を買ふ。尾崎氏駄目と。羽田の家で、外山の代りに講師を頼む西城を頼むと。二〇〇。

三月十日 講和後出来る中口研究所（八人）、三田羽二重研究所とすと。父の家へ行く。

三月十二日 朝出方に（中はまね家）朝飯食へ、まもなく帰りて（弘法寺）（高石ろうかの古い古書）（長しのを特の）。

（氏）改印事務、井上世太と話し、家内幼稚園見る。石今日帰る。三位にて中と焼酎をなんし三五。コヒ四〇〇入らし、ゆ改ものり三枚い者でしは一三三。図書館いかなかった、饅頭出かりしと。（途中電話で長せい会と女宮幼稚部多けしと）古田はまの話所ありとのみ、長伝社出版吉村正一

部に会して大動員化とせざるいはんと。金一日とるて歩を抑ひて黄梅ん紙ふ正氏を訪ね、落家先の家より、地震にて壁とはずれしまい。抑ひ所を之せる、住作る。モスターフィールド三ヶ月みて帰りの流車いのる。小百姓部部部部一日一ケと塩まず、長しをる。帰れ入れるひん羽田の人ひき来る。

三月三日（日）朝出かけ又一ケ来る午後活結見す。意外中とうし。侵入のねいり者ねらひて帰る、迷ひて父さん会（は傳法）えの今月末の来月初出ると。

三月四日 寒し。通知簿位よ出ようひて来る。二人とも優は一、優は一、優は一、良し。地位より新聞年賀状を。父のいかき。午後八木の望井見物ねば、ゴゴ。ゴゴとティートフのフェアース語集みせてもらひ、とんと虚書房にゆき夕八〇（五〇〇）買ひの世話してもらひ、耳動かすひとりん安く。雨細し。寒し。

三月五日 昨日動せしか吉田嬢代りに来る、八木嬢と妹（日系紙、今日之記）よみ合す。

三月六日（三〇）夕八〇（三〇）。塩清会。「南部と西部」ちゃ尾ひ十五日と、止ゴカ。塩書房ちゃかき、二ケ八日同人来ると。

三月七日 休み、午後ほねんやさん長尾氏より「蘇家姫」出るやさぬやさらと移浦にいかキ書く。家、父さん話せしかの家傳ちゃし。長銀海にて高野氏に会ひ話す。

三月八日 下痢、一日休み。吉田嬢来ると思ひしんまず。小山正氏より来ちゃかへると。父ちゃとうり草伝りにて二〇〇円今一つは三〇円とてとり出ると。四南

れて来る。ねんて買えし也。

三月廿八日 雨、下痢ぶし、頭おもい。六時ごろ、ねよ。僧侶すぎはそこ入りて七五三やる。接待多し。夜「燈」の冬木、大度二を来る。ぬを祝儀許し、来ヒ月八日と書く。「燈」ハ「不二」まる。之れは「小島公園」の予告なり。出ちん。

廿九日 雲の多き。朝、叶後場にゆき芝居家なり。地つい大会にゆく。三宅大教会にある由、「えにわ館」。午後はまだの鏡作神社にゆきしに、原正頭、吉野郡川上和西河の標準林業試験会にあり、去年五月北海より帰りしと。夕方て帰る。

三月 (四) 出勤。命ぜられしと、かねて、書一冊、同氏に立寄りて保田家にゆき久山に話す。陽の西条家に寄りもよりて、夕方帰る。接待。あと去来まもなくねる。けの咳の気味多く不快。

三十一日 出勤、朝から流なり。三、五、三の伝ハ始業、一、三、五、外ハ三十一日。休業なれ、廃じ。午後南堂と、ホ紙、帰途家つとめて帰りて上まと、服部にゆき、呼樓二番目、銀話し。らい、主て落。井上嬢をつれゆく。古田嬢と同車、橋井に下し、夕飯後とれハ来ゆき。幾仁堂井口につかわしたり。語堂(テイトフと)二つ。

(二) 借りて来る。けの小山より「食後の咳」区切、塩田氏より二十五。ハ本人と、山川主より弘毛の選結果、斎藤より高等区都、山口より補。

四月一日 出勤、タイプ打てしのみ、午後休業ゆえ、八本君来る、酒を飲まる。夕方帰宅。朝、五日分してまる。書木四巻一冊、そし、橋呼。「燈」。

二日 出勤、午後ゆえ休業、吉田嬢とれい帰る。山川主より分、「南北」、大島、役ハ二部(中を宅家にて帰し留守役の芝居より隔離病舎へ入れと、面白し。

三日 (神武天皇祭) 芝居来る。書「花」一冊礼に寄る。月俸三日と。
(吉野、古美、信田、同氏宅家へゆく。新かな」の古の「海辺」。
夜和田方呼ばれて送別会、今後帰て来る許す場合の決意多。縁ハ一度と中せしとその他。

四日 出勤、分配ぬしやる。午後の休業中、長徳へ「ちしん三和君」仏之(長ちゃんゆくこと。電なしての帰り(切符ツーストの乗ーして)第ゆい宮(し)八本にて下り燈書舎へゆき「大和神社神の考」(一)買い、多量に買ふ。橋井母上(来る故、ゆえるい来まと。
夜また電話「昼ん来る」と。

五日 投票休み、午食ゆへ叶後場にゆきしに、隔離病舎見にゆき、投票、知事候補六人「立てなし六数すこしなろうとし」。午後ハ山ゆき、父君のそれしか見る。朱紅。池に「海辺」読み、百多部書(四二十来。(八かキ五。来)

六日 (日) 晴、予定通り橋井へ隔離病舎へ一時移居、情ぬし、吉田八本二嬢午後ハ来て来る。一の愛。書食夕食をとれんず。芳野清多の来。電球四十ワット(三五)。

買七日 定勤、ふへ他にと家中のを語る。午の刻過ぎ大麦(70×3斤)里芋(100×2朝)
すま(100×2斤)野菜(10)買い来る。音茂出。午後三輪の池に買い家が
ちみんやしに行き、知事和金受帰る、再選十五。と。
たえて嬉しい心のつちみ(いえ)やらずゆか身をとりの来ることく
明日のパン思ちつつをくてイエスの如く食しみたとや
みみをみうれいてくてわたこれかく思ひはれて(をしらず)
八日 出勤、十五冊合算後、ハンガース語辞典。八木嬢の送別会、
わが撃壌、拙紫る。義各氏配表と、服部ハやを明るしやめ
ん行かんと誘ひ。
九日 撃壌、十両午後ゆかしく相ゆめ服部誘ひ、ハやをしい止めんと。情操さし、
話しその配宜なるん来れり。帰途三輪ん方池に至る印君に
家のそをちしい配表分ちのみ分をしと。ハからし。
十日 撃壌、出勤、午後作業、ふれて来る。はみをしと、ハからし。吉日
嬢と迎え、八木ハやを「嬢」の同人のを語し、ハサイス英和五〇ハて
買ってしたい帰途国を嬢と会ひ、堀内氏一君ゆ家(ヒとのをり
と。他にゆ世ろん橋井大和会のをちみと。夜浴場に。
十一日 撃壌、井三り大分響とをし。吉日名伝会へやく。服部大阪ん信家
ちゆめなと。
十二日 起きはいた婦喧嘩、他をよ家出す、ん。三里を歩て上海
世と建い合ひし大阪の寺(ましん云記(ゆとつれん彰山

買
十三日
起きて服部老人と二軒ハやをし他隣をさらし、いと井君ハやを語し家に
帰りし他にゆ無ちハて蔵逢、二〇のちしお寄ハやを大陸ちのちを受
取りやを弟ハて敦約(三〇)とキャラメル(一〇)服部への礼ハ買て他ハやを
母は弟にやを服部ハ来二軒借り来部へ帰着二〇〇。午表和五日で
よりしと。大橋井ち午後表ちを来。建ハ記帖もち帰りをる。
十四日 全五宅の切分買ちハちより買りつ、一〇、三〇、三枚着、母ハ(ゆを話し
国書館へゆを寄れん池建ち十六年」をせ仕事(すし、一四、三〇出、
奥ハちハ一ヤハ一三七ハてかちし六三五〇ちの取り服部(ゆを中村ちをと
五洋社会の話せしん浅草ハちくれ夕食たべて橋井へ二、三〇着、廿廿話
七〇ハて二里久宅ちし。
十五日 必勤、他にゆ買場ハゆを里芋(三メ五五一二〇円)菜(二メ三〇円)。菜一メ二〇。
里芋一メ二五ハて買りしと。カメタハコ(二〇)買ちおるハゆを「不二」を取り、不
二とアルス(区事(五五銭)し、表婦老人と話し来の世話ちみ、午后後場
へゆを世ろん会ち浦塩の与隊へのハもの宛名書かてる。引揚者(春之)の
夫人と表婦老人と来り落合ひし。カハコ配給(一四、二八)。夜芝居と国を
嬉来坊
十六日 出勤、整理二十冊、スペン語辞典を入れ、吉日嬢帰来、荷字秘ち。来二軒

と等しくて京都（着、金わたし、十七ヤ）に泊る。夕食後大と碁を打ち。
けふ近藤氏人金五十九〇一三〇。金子、他にず手紙もなし。

四月十七日

朝、大と三枚（ゆき、兄に橋井に出し、執務、服部ゆきにいはず、鳥ことを
話し義伝氏の妻子のことを知るべきのを話す。汽車にのりて電にて帰
る。

十八日

伝氏よりワイシャツ三ヶ来る、大に金物出し、ホテル
（公使下車ゆえ井家につくる。石渡ゆえ）
を訪ふ。夕食印地をうる、高野氏と食を家へゆく。

十九日

朝、おかけんタバコ出ゆき清端清。古家屋をかし兄に
ことつけて返まいらふとし市廳ゆきを同井に会て古毎（来ゴ
ヒのみ、日銀で鎮雲会と朝ゆき、谷山、ゆず、つう〜歩
し古家の喜をいたろく、寄くしひ引き一〇円かゝ〇円とる。毎日に
て書役へや断られ情嫌しるから朝ゆきはなのりをり、べこしりとを
寄ゆおし二十日とうしと、一三すむ毎日ゆきは伊藤、杉山、中
野部の旅、山形（故実）中婦（十三）その他之弘のいからし、伊藤と
話す中、同井まりゆうゆ（出（二人分かけ夕飯用意しをり
と）久米田の帰山家ゆき（三十六ヶ年ぶりに二〇円貸ゆ、百
円出すとしのゆ、宴をするあ泊ゆしらして帰る途中、田和家へ
寄る。

二十日

朝、田和母堂ゆ七ケ月ぶり夫人妻敬君と紹後家家（帰りし
ま敬婚話ゆと、沢田氏ゆとゆ久芝いゆを依頼ず、山田鷲氏

辞落去とのこと、沢田の月給六〇円と、伊藤の家来長相手の淫
賞家とのこと。八木にて金井君ゆ話ゆしのもゆ帰る。小高
地ニゆず同峠ゆ落任と。

四月二十一日

出勤、山田氏を通じて富永氏ゆ橋井と教会への行方ゆ。
吉田嬢ゆ会はずれにてゆ気を通じたりと。高野ゆ氏三郎教
あり同情しをる。

二十二日

大探険のみ多仕帰者と、先ゆ出発し義伝ゆいずれば大和之の
会通ゆし模様。けふ月給出ず。帰途義伝ゆ社ゆ出五月
二日会と（神田氏ず承諾まゆし）。母は予配ゆてみたゆ会ゆ、服
部ゆ塩幸受取り大と五人ゆて橋井家、色幸田君ず話
ず。

二十三日

けふ給料の一部として千日渡る、藤沢拓夫来とて管長
室ゆ同合せゆしまず。服部ゆて将棋一番、勝つ。帰て富永
銘者の行方ゆ橋井大教会長宅松氏ゆ会ゆしゆ宅ゆと。
七時半ゆ中学の明治四十五年ゆず。

二十四日

役場ゆ芝君ゆ会ゆゆたゆゆ郡行、俊君ゆ南谷同行嬢ゆ郡行
と、男坂ゆて印二貫匁の張出来、布一二〇ゆて五ヤゆと。もず米二升（一四〇）と
麦三升（八〇）と芋一貫匁と交換せり。午後吉田嬢来り九十嬢ゆ、後
来田清治君より火木ゆゆ〜ゆよまんと。かんてらゆ二ず買ゆ（四〇）。

二十五日

家神陀洗ゆ是芋ゆて休み、汽車ゆて八幡ゆ出ゆ敬君ゆとゆ

ひ河内板橋にて肥下を訪ひ種々を話し晝飯後、家建て
る筈なれば、朝鮮を南井の色いろと。芝井さんと三郎母と話し暮
れる。み、度忘れ滿洲に残り猶叔母様。夕食くして帰る。
鮮と来る外といて二重句なりしは。

四月三十日 久し振りにて出勤、相変らず不快、午後文化会なりしが羽田博士来られしと茶
しなして近寄話いやを吉の幸吉中、谷義春（羽田）らの一団に会ひ、この話
いなことに見近答に因る。皆五に来演者の会と家のを一寸話す。帰れば
は来田君来りその後会を断ると。義田義雄、講場まらかき、二
十宮一時講演会とと。

二十七日（日）朝、国宗嬢と芝居定へ行く（全）十会ひ大教会の件後相し
たのみ、伏日へ行く。午後国宗嬢来り晩ライ義へ、一五、五〇。晩、
北白の池に（中を来一升（一三〇）飲ける飲物地を与ふ。展帰弟
弟弟と。市場山ラ電を使ふ。南帰（中を又弟無まと
そ、陰場絵いて会はいやとる。

二十八日 雨、一三〇。講場清まり午一二〇。いて思ふ、大豆九合（八〇）
いて飲け、講場と同車ていやを吉を見訪ひしも見勤、他不飲
いてもるいやを物拝見なの（注）ないて様井帰る者。

二十九日 三月中、ずいぶんおいてう校長伊藤氏を治せしと。朝国宗姉妹来り
芝居事、双思う。夜米田君来り話をみ合せて。けの三理揚井之社会
ラ婦人まり宮のことなりなり。をし。「新家はの話」よい。をし。

四月三十日 去帰途を午会議をん投票後ハスいて出勤不れは掃除すみ
句会、富ふの講演すをし、五月五日七時を月給渡り
ゆ。四しを（約一五〇四日ラ）、服部いや出仕理てし、中和
石と三現を清者の会ラ作り配こ使ひ会よ。家の近くいて
守田川陽福面陽の一芝ラと会ふ、三現外語「を」業せしと。中華
日新い話二篇「車中」「此ふ整城」書く。

五月一日 出勤、午後来五り、紙ふ来りて教話を。服部へ来二外吉は嬢い拝ふ。夜
米田君来る。去帰明書道（三三四五）と祝ひいなる。

二日 出勤、八木嬢久し振い来る。名古屋の「世短歌」の事務
来り不稽立りまていと。午後書絵ひいやを川伏日ラ約
法井、富ふと「知之ふ」の相談、谷石ラ名割せラ。大和
日ラ〈いやラ三三〇。帰宅。夜正郎ラかき。

三日 六、五六の汽車で母出ふいやを吉日嬢とる郎へ墨ふいやを「松漢紀南」（三）
除けいて松ふる山「前滿洲の南日と日ひ」（一〇）、吉日嬢は日舌山紙
（五〇）五冊買ふ。（注）。大、羽田の世話を話南ラを八〇日ひて（注）と。
羽田へ行を南芋ひらを。帰宅時耶去書と夕食、早く眠る。午実し。
四日（日）飯岡る云の（今井）祖母を（中をこん後ラ和文不在、祖母一一〇ラる。楽し。
三住いて富ふ引て一日書。ふい（三〇）買ふ、八木へ寄り井上嬢の父母
いふ家ラみ嬢書ラ（ふれは世君石り「嬢の原稿ラ話し耳紙ラ
宮まいて帰る、帰り筒井と帰上と来と会。国宗嬢来る。

三月五日　出勤、中村弟君に就き清水の会の起りを聞く。羽田の菊芽吹く。筒井縣上へ手紙。伊藤へ小包。帰途服部へ寄る。ガラスかすかの日の古家教」より。

六日　出勤、吉田嬢より「白雲山話集」(五〇)譲られる。ティートの家しと会談とやる。寺島兄氏来り話す。妻加藤へいまだ現へ帰らずと。妻一ヶ月ぶりにて重態と。夜来日来り話す。「妻も二三男に小学校に習ふ」と。坂遠近に伝ふ三輪、史氏名々へやること。

七日　雨、出勤前ゆえ不退、家出せしにより「ふらん書」飯倉としてのうへ入れて母はるにやる。「寸聖鑑」ちり和伝にゆえしに当る一家あらず、かからし、雪なれて帰る。

八日　晴となる。暖し、出勤、ティートより「隆慶實録」写せしのみ。天理教「洋学の会」のことにて中村兄弟と話す。中村孝元君より「雨物語」見る。

九日　晴、寒し。仕事外りに同じ。吉田嬢と雨日かの。どこかへゆきたし。帰途橋井氏会石宮坂氏人い家のことにて「秋日」と。

十日　出勤、吉田嬢体にて手紙おこす。日和伝る為に人経営ゆえ来る「妻一承知の上で修養和へ来たせし」と。父の許へ伺ひことにし、七一〇日(おとつ)しゆえてのち吉田君訪ね、服部へ寄き、吉田君をまた訪ねて沈黙なへ、寺島母と四人にてまゆく。三伺えて別れ父の所へ行く風邪。大、徹底会ありしと。

十一日(日)　九、〇〇寺島母来りて父を話す。寺島氏に立。日比谷、市電停留所にて分れ、墨文堂にて「東文」(三〇)「英和辞典」(一〇)「千年史」「語の研究」(一〇)を買い他のものにて「猫不建口遊」郵送(八)買い、富くじ(三〇)のタバコ五を買ひて帰る。橋井氏会にかけ三

十二日　出勤、吹雪、腹痛ト病、戦争仏合来、仏国、峠軍行来る。

十三日　すべてのち一定伺とのこと。

十四日　出勤、吹雪、腹痛ト病、戦争仏合来、仏国、峠軍行来る。

十五日　中村代議士当選、四日書を国大書内部九十巻の接収。三日間満文書の解説講座、二十三日八木吉田三氏と部へ遠足のこと決めたり。帰り汽車にて富坂氏と一緒になる「遠山ふら」の地位を言はせ」と、「女性短歌」へ入れ」と。買物。

十六日(三〇)日本紅霞和(三三)ノート(一八)。

十三日　朝多忙し、午ッ堀日民一来り、当選五八印来り、外語の某教授来り、会話しゆく、書一すれ奈良図書館会員来りて安達、治ていり、養伯和の鈴木治氏来り、一七〇〇すべて八木吉田三嬢と話し、帰りて来田君とルーム懇話、夕食ト病。帰りの汽車にて話せし仏伯爵の話。九号は橋井住のり、大谷九四文甲古身ろ。

十四日　出勤、けのいて来る。話せし洋妻のはの写返す。三村治吉来り明会治吉と会して。帰途中村君ちゃとゆえ会洋学の会のことを知る。富山研究計画ある由、一の巻。中田の係二名位とやせたと云ふ。

首にせねと、夜西宮の家へゆき泊り家へゆく。

十五日 教育し度ものと(一〇名一一〇円)鈴木氏のところへ言ひやりたる帰宅、すみて畑、つゝ俳句会不出る。古田君と話し古田嬢と柱十娘さみ、宮崎君いやを帰途来もらよ、来田君まり蔓延する。明日もまた蔓延する。明日(月)俳句会。

十六日 明日遠足と、執行かねとて、帰途服部山を教育組合執行委員長服部氏へ同行、そして「図書館」の反感強くて加盟断る。多度し表紙をする家訪せしも不明、三和台。つ宮同級者「同年ぶらぶら」「野上の名は弘」と。

十七日 遠足にかゝず書寝、午後お師匠叮会代表者遠のれんまり、(「堀内」)(慶堂遠足しに)を堂ち陸名、来遠る家にてこゝにて後、家を出るとかとしし。表井る(疲れるやを一〇日出る。主的帰宅。

十八日 昨夜れいるら星球、午後依るの変持中西芝を家庭訪問、柳ゆれて三現女の家訪和去ちり、送りもして坂。先宮君を訪ね話。

十九日 古部、修養和の遠足会と西を表せる来り語る。午後まり、仙石山崎二執行委員会組合の一部始終をるよ。古田、八本二女れん中後家古田よ泣きて困る。

二十日 出勤、古田君遠に付任せして我嬢なし。組合はの組合を開くこと。書一すで給和一五四。月中現給八四。月(四月分の現給るるしゆ今月すと他に七三〇円。帰れば建来もり金色一〇四。月わたり。中尺化(化)(全)ち一五〇月、不二出版れる三〇月。けよゆん二七〇円入りたり。来田君まりんーゆよのうしてやう人と、語了。

二十一日 出勤、組合加入を許せしと。表ゆるまる。「表一えし昭。一緒和文月下を家にいちと。田中芝来い人会ひんを現ゆるへゆけゆゆ氏(大言球球部ヨーキャー)ち、ち遠ちる。午後芝来嬢りしのは三月中い柿井(呼ふことをゆ。帰りいる酸罵ひ(三五)、それしてゆの塔位言格芝を外山の宅(訪ゆ。三芝とんをしを若をお嬢とんるる。帰途保田いちゆ父君と話し玉蔓もうして帰る。

二十二日 出勤前来ている義言「弱の芝」(三)男ゆ、古田嬢八本嬢呼ひいゆかせしか来ず、わか整理せしを大分入る。女洋学の会の広告書く。表芝よの話をしとて修養和と三浦君他一人来りわか神(しかな)のをゆ。帰途敷島話所る田中芝来い会ひゆをしゆ話月、明日遠へゆくと伝ゆ。夜来田君とうして。

二十三日 出勤、男ふる組合ってのの広告、の喰、それすみて急ぎ下手んゆをるれ中和君と教育、教後仙石ちる男の気おきのそれ、われ芝よりと。午後をんあ手伝のをそは表、又反駁しおく。芝ゆ(ちる)「柿井(呼)長まし明日何ひせばと名はる、死ちるんた。帰途敷島話所へゆきしも芝来遠をへと帰宅、帰宅ゆ食後、上ちる呼ひまり中を話し、ふゆ会(ゆを、情ばすし」をれたり、「この杉和ちるかきと回答」「原稿しひしる記ちを。」和田芝(白芝の遠「竹氏」のを、杉和「語のる」。

二十四日 出勤、八本嬢まり誘ひしし会(ゆけわと。居張りを納手伝ゆ。小幡

[illegible]

より徐氏の書籍代の報の確認届る。満文書籍の書目吉田君にかく
し中村君のところへゆかんとせしも途中にて会ひ、富永氏帰京と
話せしと。

2月三十日(日) 朝起きて米研れて、食いかを父の家へおくり羽田へ行く。水
喰ふ一家上まで、研究所の方へ行くと、なほ家の話をへの後
言ふて田代へ別れ、八木山君に会ひ、嬉しかを「南洋民物
誌」(一)買ひ夕食より山地へ出でんとせしに、瓜弦の外に出でず、
みて、出でず。(一)。日暮れ夕食せずして地へ出でず。二時まで
話す。

二十九日 二、〇〇 月曜の朝なれば八、〇〇出発、家を出る(ゆき大に寒し)
食い会ひ指数西山接待し、園へ一一、三〇着。富永氏「ちの」を用は
ずして答へ、陳名時帰りしも、加賀山来りしに接待へ入りしこと
とする食会を会い書をとり求む。加賀山を送り帰宅、代わ
進給。私を「芋の会」の接待三五円(税六三円なり)、会代書
庶務中多の「話の論理」のこと。れし。移動の新聞は人双書の
「図書館のこと」田舎出、方へ陳紙不足にて加藤と藤原(保)に
二、三。加賀山が話い将来のものつとして起きて帰る。うれし。

二十七日 出勤、手鏡(一八)買ひ、仕事大じゆり相変しゆり去日君を使して満
文「今七十歳」代い一〇。日本と買ひ中ちすることを、加賀山の我友
は名を変えるらし。中村教授とともに帰り、楳本の拉致るいわゆ

中を出人と話す。書をしもの行しなし。会代書店へ送業、夜来四時半
り食とキャベツとを。食を送る。夜来就寝。
2月
二十八日 出勤、途中より半紙買ひ五枚半日、去年「十七年」(三五)、煙草二十円
吉田君「今年紙買ひ」と休ム、日の事迅ケしいて断る、山中女史ふん
いろつく、帰途義弟にかを鈴木氏と話し同れの茶を「転」て話す。
四年ぶりの来る神田清の編輯へ四月。夕方七教会にかをしに会
ふ。夜来就寝、前日迅速、中村教授中へ行く。
二十九日 出勤、東洋学会に中込、和尾君、吉田、山中三嬢、午後陳列をし、帰途
外山「太平洋」と上海」(三三)買ひ、「蒙文今古文紙」より吉田嬢の所
に寄りて帰る。夕食後七教会にて十時の間、六月に移動とする。
来る。来日名来り明日園へ来ると、車使し給はるとの。
六日出、東洋学会に中込、信一、峠山嬢、教授一名。米田君来る、書籍見る。
三月(明食)君来る。「鉄鍋」の私ふみ。一五〇〇より満文書籍の解説。疲れ。
八木嬢、明後日来ると。「中華日報」に「近文研究」の事。香山史学会代表
会より十五日まで「研中学」に話をと。伊藤時代「歴」の話。
三十一日 出勤、大掃除、俳句会に出、管理学東洋学会のことにて電話入る。中村家
に相談せしに若干人より、八からし。午後陳列中に将棋。夜来
わ氏と会談中と。十日前の家賃を交渉してやると。建物なく
いはせ来ると大来り一升もち中ちと。
六月一日(日) 日曜、八〇〇の汽車にて八木吉田二嬢来る。その前に来日君車もち出る。

移植始める。吉野桜、折柄来し同じ嬢と会。豊子、移植終り、
教会長の接待にて芳嬢等（一人）買ひたり（お寺、吉野（一二二円
五五五）八尾信家（接待、来田君の母に礼をうる。五、〇。却入のよ
人足に早々去へ、三嬢ここに叶い出、妙雲寺、西京、保田の信家へ接待
保田の弟玉蔵氏来る「影山正治、印刷アスビ来る」と。松井母子似たり
八〇中。

六月一日

出勤前に鈴木治氏の許へ寄り、安浦氏の会合を相談し、南会延期とす「中止
等長は会長好きなり」と。大和文学の「奈良寺炎上」三千部買ひ、吉野をゆびし
せんと。吾反対す。吉田嬢に「ゆめ主張す、富永氏（吉原を会長、ゆ
ゆ宮ちゃん、明日より拡行と。八木嬢来り「話所一日十一月住いてす。
尾崎会長は曰く。小畑君、新井氏ともに窺を受る。

二日

出勤、中村、服部両氏来り、宮田家（明会より来る子
ナのみと、酒外「知識階級」せりよりとし直をもけ三十二円、羽仁「こと
うてどと」買ひ、二十八円。けふも暑苦く、義氏より渋井氏まり大
和みまい「なるる会上」十数位と、中村幸彦、吉野重紀来る。
夜来田君来り大根を。

四日

大阪出張、汽車にうもいの車、辻君いやげ「塩」西条の漬もと、藤井
写して来三冊（一七〇）、千円預り、松橋書房（中を代表の自宅にて。シヤ書
買る。一七。勝いて二十万円と、石浦氏を鳥取（やめて留学）藤沢桓夫
のところ（やがて地区す、「松葉」女子学園世話せんと。池辺とともに出、勉強

の十八〇にて昼三、五江両和文に会ひ、河内松原に中を肥ト氏で晩食、
仏教へゆく途、肥ト氏会め、竹川宅（中を嬢等一〇本（一八〇）、帰れば九時。
女の男子しゃピス（四〇）、霧伊「手持内」（二五）、「ゆまとゆるゆる」（十五）、
（三〇）。生自五（二五）。

五日

出勤、出張招費十五円三十銭ひ和江印刷二千八百枚ひ、「ゆ天」買ひ、作日
職員組合の報告書とし。前川氏に土曜に来てもらうことす。寿賀子宅話
「明日女帰ましと発熱」。夜来り来田君に羽田への手紙出す。西京君書（来木
「ひ」もてきれしと。

六日

出勤、けふに金伝氏、松井保治君より「母君死にしと。帰りに八木嬢の所へ寄
り月曜ものを報ひ（鈴木氏より大和文学に乙て相談）、珊瑚の節
いめ星上。帰りて入浴、帰途保田家へ寄り「影山正治明日来る」
と。（寿賀子より来電、和永氏来信）。

七日

出勤、到前川氏宅へ中を中西氏に会い依子の岐阜行を話す、前川氏と
小西氏の家へ赴き、会長定に中（家賃三十円と一〇、畑大しつかをよしとき
る、会長夫人を紹介。書会にてもらひ送りとして来採まいりくつも
りし書の報、中構内の天外治を二人来る。夜保田家へ寄り影山氏と
話す、二三、〇。帰宅。

八日（日）

けふ日直、一日早く話所へゆくこととし米二升、二〇〇と日用とともに出発。
書すむ同じ和文嬢来信、阪の近くまい迄りて友話所に入る。八木家
いて昼食いたいき十一時宅の宅へ入り吉田嬢と自転車、腰ややが收まい来

て眠れず。

六月六日　出勤。朋和、母上来訪、帰途鈴木治に会ひし「大和文学」の件。夜前は妙蓮老来訪。教祖の記念にて講演の為め、芹沢光治良と知人と。夜故郷のこと熟睡。この三四日陛下伊西下賜記事に涙催す。

十日　出勤。中学校卒業式。夜帰りして電話して安津子の会。翌会式十二日ときまる。帰りに海老瓶詰買ひ。石田「西人の文部研究」(三五)中日物理教授(一五)買ひ。この日七二。ふとした也。夕方子の両・隣家の青年、八木君を嬢来訪す。(蓋伝れば大和文学の後出中日と、将棋とす)。

十一日　八木兄君に池袋の人にて今西教授を同郷、因縁多し。この夜朝夕話し天理教の大体を識る。翌朝十九に昨日の姉崎氏服装出でたれ。として大驚む也。三日休暇とるべしが、来週の中山学長にまゆば安津子会やるべしとて忙し。夕方朋和、中村家のところへ明後、十日嬢子「安津子潮」とかいる。

十二日　翌朝、日比、安津子文芸書のプレゼント作る。午後の裏会ずい外語教授四名、学生一名、十日田、崎山、中三嬢と八木嬢。十名。学長熱心。裏会の録のこと。一八〇〇帰り、来し吉田嬢と八木嬢と話す。和田先生子へかき「安津子園後の出版ガメ」と。小学校本部「家国教育」と。

十三日　翌朝前に出勤中を「学生部時代の東大寺」(三三)買ひ、吉田君と会ひてとしいゆく。姉崎氏午後合家へ移る。経過良好。八木家で医別安津子。同行

代し、外語の教授に会ひ、安津子会に入会申込吉田君になせしと。明る君をまい(四人にて密室(四の)食ひ、名の(もんし二〇、五七)買ひて帰る。多の月は三十日。夜男帰宅の意子と。同日家、隣組のこと。「不二」医ノ来る。

六月十四日　久し振に法華に登校。大掃除、茶の会、一五、三。吉田嬢と医ときて名古屋へゆく。元木宅へ手紙出す。蓋伝れば「大和文学」の後任、「中華日報」を紹介。吉田君教会長を縁後世話ずれ帰宅と定む。七月六日A肥体ヤ八月二日まで。帰りて熟睡。かしはせのくんかへることとのこのところをきてわれはふるふ。

十五日(日)　筒井、帰上、八木明日五〇来る答ずし来ず。午後岩井、中谷二名来る。岩井君英語の試験にて訊ねし困る。細雨。

十六日　出勤。ますますゆく。市電一月となる。父の家へ中ケ谷移れ母来る。十年振りなり。文をつくりと云ふ。三京、大学へ羽田訪ねしあらず、女方文化(ナニ)教授会。羽田へ安子のこと。鈴木後任、家を四五。と。安子の話てく。池内氏元気。鈴木後任、三上去婦喧嘩。仁科博士みえず人設立三上ヤ夫人を伴ふ。三上去婦喧嘩。仁科博士みえず人設立。もしも吉ヤしと。一五、三。録去帰れ一九〇。父の家ふ多教授会となるべ家の。

十七日　出勤。花見として「五二五七五」の文部文しまり。帰れば角の書かる「イネ侍」の進行同合せ。羽田ふの者。ひたすらん高ひをおもひてあし年はわくるしまずわれはありしを。

十八日　出勤前教授(十五日)、欠席届ます、可笑。蓮茂拝。

六月十九日。出勤、山崎君、清愛組合の如き会を企画す、吉田君の日記を見る、七七五のものと言ひしていさらんをとめの事をすびしけるはや。帰りて八人未書く気となる。けふ角山書店に八人木八月末までにかきすべし。

二十日。欠勤、依記子男児を出産すと行とん吉郎。三食粥、全くて困る。変、仮稿成り、馬鈴薯掘り、田植はじまる。「昨日まで立秋暑き期の休み、けふに職業畑のみ一日間のみ。」

二十一日。出勤、吉田嬢、けをけを休み、かわりとかへ行きくみと人ちよ。午後雷鳴る。四手代て、駅宣とそう宣の裏のみ、一五、〇〇出ハ本家（ゆく金中服部ハ）会て訪ねるとうれ、伊義代氏祝宴て（二三）八本家（ゆき、ひやかす芋掘り）いろ服部のやす、駅までゆけ吉田君来る、井上嬢の家へゆきと。三輪氏下同来、帰て休むよい一日。日記し、忍坂（ゆく留守にいろ三人つれて同行知子氏の家へつき話す。

二十二日。午前中西条原「炉」もろ宣る。午後吉田君来るも後日れて名井家へ蓄二番打つ、吉田君二〇〇〇帰る、けふ来迎るの若松毛布一枚給表のもち来る。筒井病気て来れいりと。

二十三日。出勤、すまえし、午後金庫の整理父の名動もてきまる、三村氏。吉田君来る。帰りて来三年もて来井るんやく。勉と話し帰れ土曜来。

二十四日。橋井氏会の仏壁、家位とこと五のと魚と俗もちゆく。洗ないのりおくん、七、五二の下りにて八本ゆて妙書房でつれ「魚」（三〇）「ポタレ弱」（三）買い

ひやかす芋堂にて買ひ日記はいかをしん明日まると。帰宅吉田嬢ちゃみつつと氷とおでらる。夜来日るまり「ひやかす芋、玉ねぎ」宣る。山名井家（今を先人と出会、会いて二時（四。七七五のまの会）ならんと思ついしいとまなくしてひとめれ別つる。

二十五日。出勤、敵役ん使はる。すみて服部ちゃと帰宅し夕食たべて帰る。組合の要求ん若干通ると、長気地なし。鈴木治ちゃかき。

二十六日。出勤、五二の洗ないハ本下ん八三まで行くとん、ちゃ（ゆき三日るいて羽田と会ひきけば田村治太ちゃと、書食後佐藤氏ん会ひきけば今西のしんちゃん帰郷後一日ん休しと死ぬ、横田氏帰国の一時もあるやせしと云はれし、なまにゆき自場、森、高杉、外山その他の諸女と坐談、羽田と烏丸いとかれ女の家ん中生、夕食後帰宅、四まで一時下て帰宅しは二時は寝るりし。

二十七日。出勤、午前中西条毒ガス事件色と云ふ。午後、安津宗の会のカプリレート書を例る。鈴長太吉周伝と管理に色と報ものと注意。酩君、渡井氏て行「安津思潮」もち来して言つけ。雨降る。田植雨と氏ぶ。

二十八日。出勤、宮ん安津宗の会のもとの、金一封を出せと。長徐社の吉田君来て「和文学」のこと、富田永のこと云て断る。「安津思潮」「幻想」もち宣る。午後安津宗の会、中村兄弟の外八名。「諸蕃志」やらんと。すみて吉田嬢と八本家へゆく、兄君物の会報もち。明日おしあき姉妹いこまると。夜周防嬢来る。岩井家へ著いあばる。

（昭和三年三月十、りせん州ろりルバレンと）

二十九日（日）八〇〇のこれなにて八本姉妹、吉田嬢来訪、吉田君の医の会として報告。

午後国を知る。向井君の父ハンパーカーしのぺんん修理をみて成る。夜、外語を言来る。

六月三日。出勤、大塚院、吉田嬢の母君をよろしくと。パーカーペンん士田嬢ん
ほとんん餞別として贈呈、義姉さんの伝言、字屋取扱もち来る。帰田
又去る「近代精神書抜」贈る。文部館の配給ち(三十×一九)。
出版国体の追放発表、官広告ちる。三好君来る、田中君来
来る。吉田君と西いもれて帰れば新ハ本君来、ちれしパイプと伝ふ(の
夜ちち来る。夜向井国で保田君をまねる。保田「大和文学」ん弱かく
と。

七月一日。出勤、職を任合の話、伝統ん喜ぶせもちよ。帰途三重紙社ん伝ふの
伝ちつちよ、家移りの気ちしせちちやる。献傷ん中神多寄有、山のみしと
ぶ。て中ぜての花つれ。むらさきのひとつみてかしいすいつのりまたん会はん
をとめむ。帰れば来ロる、まち、休みと去りしと。西ん満ち手紙。

二日。出勤、「武備志」抄す。帰途名を士教会にち元木宗名にかかんりを乞ふ。
はよ下り毋ぼ子駅前にて洗面をテップクす、夜伝ち。陸は石車にて帰る。

三日。朝、瓦二足、狐ぬくはれしを知る。四月ち三月ん上や、大きくちち一の貴くを
し、意れ。尾西家ん中を叶会ん代を見と伝し、いか芋四貫(五ちかい)分
けて世さよ、いか芋を豊会ん し故傷ん中を伝重ん て帰る。

四日。出勤、三好君来る、豊ま(神ロ広一郎、羽田明二客来彼、管長館を
ていち、新、外語古部移出帰宅。午後館ロを出ロ、注をいのみず

西大寺まで送りて帰る。ムタ子外の松村氏、元報官商の松をとる
ら木しと。

方日。神ロをとりついを古義堂文年学徐館をさうしの冷過ち、書ち
かぬ世史医部宮、吉ロ世史の医部を兼ねると知る吉ロ世史、八木女史書ち
大教会名の書をんて国ん かると、ん れ世成。一七、三。まで吉田ち服部ん かく
去人塩とハるのプローカーとるしと。吉田女まて。車ガ入ることち明ロ七張
世和と、宅へ来ようか。三ちのとち帰宅。ようよ、多良ちカをと手紙。

六日(日)寒さく信ちし。夜入浴、住ロ宮へゆき服部老人の塩ち話す。七。俵と。

七日。塩のをんて天況ゆ之とせんけよち車位三、五倍、三現まで八ロとる、伝ロ宮
へ今伝ちたき七夕の餞別る、服部への途吉ロ嬢ん井上ロ子嬢の口話(四二一)
すを文を話ん ん。まん二三ロる接拒。帰りて書一寝、夜来迎ちの
毋子の祭と事ちく。服部ち要求ち三項目拒絶ん して寄合ぬし。

八日。史延ち、吉ロ女史八木女史そひて来る、同車して服部老人書、蕉音
会伝ロ宮へゆきて午ち へ帰る。二嬢夕方まで ロ方ちとてかゆ、ゆとの伝我
嬢わるし、米田君まち国書伝ち の伝徒人の印押す。

九日。朝の流ちして出家井るのゆを地下ん宮ちて帰る。
うめひやち南の尾根のちしとの ひの木とちてわれらをうまし
ぎをちみのうしほのひとくすてまじくといろく ロ ロ われのみを知る。
国ん かく。明版「輯耕録」をしが四部叢刊の方よくれを伝ち。他ん西洋
漢く地図、ハイネ全集二冊伝る。吉塔君の胡麻向日伝ち、妹婿君の

発熱をせる毒のため会ひへ川口毒氏訪ねるそし、八木家にて先
君の遺骨二本を帰国と、ごやか茶ありて見れんかな古日せと
ある「五本の春頃」なへを論ずで同車、けの西山如也の「華表直南
弘」(之)買ひ、金鶏三十ヶ(七五)買ひたり。夜岩井家にて囲碁。
けて行をつけ新井めとの合弟スコトウ子財の知にて話を、白
りし、アレおし人感慨らしを報せし、京海市川、ごや川のスルタンヒ子ヤ
拙わ芸家に報ずれし、アキヒー報乱せしるど。
賀船一孝氏に会ひ、孝氏に会ひ、孝氏に会ひ、ひとりて
ヒエッセにドイツの至(ず調べしのち富ふ銘氏ひきらへんとこと
ミットを言ふを交渡(一八〇)、新井女史より月給前借(一〇〇)、午
吉橋重君と出、長伝社に寄「去知える」のを断念せしめ、将棋
一番、渡ずいやを人りかちのコアの子、(六〇〇)出、駅にやけば吉田君
ありて奮氏宅にて煙草もを。話所の手伝ひにやを力色にて作る。
夕飯中駅を出る。駅をアパートへやれば服部(ますます)、古国君、
中村孝氏君と話し、渡ずの翁を(、服部へ泊る。

十六日 服部昨日より下痢と、朝起きてみるとみかを校へやけば
古田君を来る、そして八木家にて香奠使(、九、五八の三枚裏
と約してよしを宿に中(貴)尾半ばはんまう財布カすれしを西た
るいて気がつき、ちみ引返せば茶屋居ずし樣樣、八木家にてのこや
ア茶ゆみを帰宅、古田君の激粉を、いしてしら八を世一ず書ち、
羽田ずいかを、風邪にて寝とを。昨日茶ゆ君来りしと。夕方書し

未田君とうとて久方ぶりにて伊藤家(ゆけば服部夫人ず、塩六六〇と言
と、促して帰うしの服ずうをひて帰る。

十七日(日) 八〇〇の汽車にて帰君来り、古田嬢無事急行のりと。煙草買ひ
出、パとイ水を水を(一〇〇)。書食後西宮君まり教科書の話ずとたづ
ねられて困る。大食し熟睡す。

十八日 朝、紅玉堂の粉塗屋へ小麦と米(五升一五〇〇、三升一五七〇)もちゆく。馬鈴薯ず激粉つくること
定史(一〇〇匁ず六匁のみ)。昼又夫と西山満へ行く。

十九日 朝食後書ゆ、激粉作り書食、ものの配給(手捻とるにて(二、一〇)。正正朝へ行く。
長ずれへ「勝君と別る」(六五)送り、つり銘るしていかを買ひて帰る。

十九日 登録、紙布書ゆしてて下駄屋にて買かつく、新井姉弟ず南海弟
親切にて高ゆへをと。大阪陸手伝はる。杉浦外の来ていを富田君ずと。八
木家へやそんしん宅より、下駄買ひ服部へやけば長女病気、服部も食地せず
ず帰宅。昼ず、中村孝氏女ん幸世浜文わしてのち帰る。正正朝の手紙もて
芸女まず、安山氏の紹介にて去年来とを塩谷芳子ずハ来。夜伊藤家へ中
村孝氏君と話し、渡ずの翁を(、服部へ泊る。

廿日 朝服部へ行き下痢と、朝起きてみるとみかを校へやけば
古田君を来る、そして八木家にて香奠使(、九、五八の三枚裏
と約してよしを宿に中(貴)尾半ばはんまう財布カすれしを西た
るいて気がつき、ちみ引返せば茶屋居ずし樣樣、八木家にてのこや
ア茶ゆみを帰宅、古田君の激粉を、いしてしら八を世一ず書ち、
羽田ずいかを、風邪にて寝とを。昨日茶ゆ君来りしと。夕方書し

廿日 朝、紅玉堂の粉塗屋へ小麦と米(五升一五〇〇、三升一五七〇)もちゆく。馬鈴薯ず激粉つくること
定史(一〇〇匁ず六匁のみ)。昼又夫と西山満へ行く。

廿日 朝食後書ゆ、激粉作り書食、ものの配給(手捻とるにて(二、一〇)。正正朝へ行く。
長ずれへ「勝君と別る」(六五)送り、つり銘るしていかを買ひて帰る。

十九日 登録、紙布書ゆしてて下駄屋にて買かつく、新井姉弟ず南海弟
親切にて高ゆへをと。大阪陸手伝はる。杉浦外の来ていを富田君ずと。八
木家へやそんしん宅より、下駄買ひ服部へやけば長女病気、服部も食地せず
ず帰宅。昼ず、中村孝氏女ん幸世浜文わしてのち帰る。正正朝の手紙もて
芸女まず、安山氏の紹介にて去年来とを塩谷芳子ずハ来。夜伊藤家へ中
村孝氏君と話し、渡ずの翁を(、服部へ泊る。

廿日 朝服部へ行き下痢と、朝起きてみるとみかを校へやけば
古田君を来る、そして八木家にて香奠使(、九、五八の三枚裏
と約してよしを宿に中(貴)尾半ばはんまう財布カすれしを西た
るいて気がつき、ちみ引返せば茶屋居ずし樣樣、八木家にてのこや
ア茶ゆみを帰宅、古田君の激粉を、いしてしら八を世一ず書ち、
羽田ずいかを、風邪にて寝とを。昨日茶ゆ君来りしと。夕方書し

七月十日

家居、無為、夕方芳郎清子氏の病状報じまる。また吉田君（中「口子化」氏）とかき、来る清治君の家へゆき西瓜食す。ふたつ、ないしゆきんこのほどわれもかなくいた食べたり。

十一日

雨、午後、いしとなりて私よりへ答礼へゆきしに留守、芳郎と弟へかき。柳平氏い一時間半ほど行きて帰る。芳郎と弟へかき。

二十日

時々雨、郵便屋来るやいなや、「饗宴」の稿新（三五三）もらう。芳郎ら来る。移転、合金、西沢等帰りしと。吉田ゆき、私宅ゆかず、すぐゆけと。「火の木をもるくんをさのうて島田へ雪まいりする私ん来んけり」書まへ吉田君、力幅の二君来る、伊藤（ばなせしやう）。一五〇〇送ることとして雨、夕食、伊藤、伊田家へゆきて芳郎二人共帰り来る。

二十一日

雨、新の会、服部へ行き信樹四番、義伝ふんすう「大和文学」の話の題ちのまま。宮崎（重）氏の話はまだ分らぬ。夕食、服部来しも来ず帰ゆきと。俳句四十句、今年は一〇〇引かる。ナラス。一三〇〇出、加藤（一五）、力幅君の宅へゆき加藤せよ。四人ともの会（階）ゆき。芳郎へ行くのことなれ、終日子表れる。仕方ないこと書、芳郎君「玄人へおくる」（一三）「ハイネ詩集」（二五）「海色の話」（一三）「日あつる日とはくるとこる」（一三）。しゃとトレのタイプ刷おしに（三五〇五）終る。夕、野ら来へかき。力幅君「使者」（言語学のもの）。

二十二日

八〇〇の汽車で加藤（一一）と藤井（三）。来たる時。四〇〇の久三郎来る由。木陰へ出（地下室一五〇）。四時ごろ、地下室へ移動。外の部屋を出ぬ

ひんに訪ね来るのを記めしも処置なしと。朝、合川の名を補作ほしもあらず。面白き作品なりと。杉田氏へかきと。裁判所へゆきてやめの儀申し入れし。夜のもれ（中もこん毎人、古本二冊もらう。毒薬の毒ものを水仙のワとこと。（西化）二冊にて七〇〇。しかし、明日過ぎこと。明日帰り来。中金の用意、訪ね合川氏へ。（姉たち成人すし）。夕食後、ふん保田家へゆき三〇〇帰りて眠る。（家井るいて「海色の話」（三〇）書き）。

七月二十三日

杉浦と共に国へ行き、テイートラスし振りて行つ、一四、三〇杉浦とあれ、書簡のことゆきて父の言告げ、義伝ふんゆき渡のことすれ、一六、八〇の汽車にて採りの独楽ふんゆき中金明ふんへ話す。上ゆき賜る。市中の木を取り十八〇帰宅。人ふん迎えて来て「一人ゆき淋しきはいやな」ゆき。

二十四日

家居、教会の月並祭と家伝ふんゆき。夕食後、ふん保田家へ二三〇帰宅。

二十五日

家居、「和文学」の話の題評と話を書く。午後、聯合。同井君へかき。大江氏来三〇帰りゆく。

二十六日

書簡整理。ケイ来田君と伴め。義伝へ原稿出す。職員組合。医給来。中村君へかき。午後、古田君来る。題話。夕食。力幅君と中の家へ（三枚時新社工藤君を）。初めて会う。信九伝ふ義弟として伝記をおいて、本村氏へゆき、大病を経ること。住し

十二月二十七日

三十日（日）

伯父下熱。案寒気し、無為。夜伯父ヨリ下痢発熱。

昨晩より雪降り、夜半に至り積雪多く、伯父下痢や、可。

二十九日

家居、夜半井宮より来訪、水蓉桃多く呉る。伯父下痢や、可。

三十日

郵便より父、杜甫、今尾より届く。

三十一日

雨、山口、伊藤、父、母口へ手紙。訳田氏より手紙、母和の伝説を

母口へ出。午後、義井氏へ会ひ、新しき

年賀状を持参。日暮れゆく。久しぶり弟子の会はじまり。

火木山

我們立誓了——永遠記着不忘！

在一個丘陵的火木樹陰兒。

那個姐離去在遠園，

那個丘陵聳立，默然的，偉威的，

那個火木樹接動，遠山婦田園一陣雨裡，

我看那個夕景，連想

那個姐的含着滿滿的眼睛。

一日

若し、伯父の浮腫地所給にて悩せし、一八八ほんて寝られる。赤鳥丸人いやらし。夕八つ三十日にて寝られる、夕方白の所給来、夜伯母の家（中屋久こいて久重郎氏と長く話す。ひやか芋二貫目ほどもらる。夕八つ三引ていてなると。吉田女史（手紙送る。

二日

朝の清掃にて採来へゆく（手紙出来るやうにと）、中屋氏人に教授依頼させてもらう一部借る。西田君（採花）の家（中屋書）名伊馳をとる。敬（鄭君）

夜にいやも十三時頃採共来ると。服部家へやってもとて他ちゃ屋。作りスト作り未完にて帰宅。不二へ記送る。

三日（日）

来客なし、来信なし、夜図書家（ひやか芋）し、伯母へ琉球神道記「神名考」「淡色の話」贈り百合の花と弟君と巻古書かて帰る。

四日

朝正弟君より電話、つづいて来る。昨年十四年ぶり、山西君の南へ

して、宮崎自由を読み、畑作りて甘ちゃーへやれると。夜伯母家へやき来る

五日

図書館借りて朝清をして生ハイネ全集と久しぶりの日記二冊借

出す。養徳社へ寄り元宮君の中島の論文ほうそうとかの、東洋学双書のこと

もかる。一三、〇電をして帰る。夜来はる来る。伊藤より手紙、今之助より

来る。父より「杜甫」る為ハ、ハの世伝にて大八洲書房へ出さねばいかんと。

六日

朝の清掃にて服部令夫人の味（中山勝治夫人）来り家のことを伝ひ。山

田廣夫氏より来る。外掃ひ夜新しき他所給。ハイネ伝二枚書く。母田

多手紙、十日遅れ来る。渡辺氏帰国せしに付依頼。夜保田へ酒瓶もちゆく。

八月七日

朝仕事して出かけ、夕方帰へり、夕飯安香。夕、朱田君来る、九時まで。

（一五）雲よし。（十）

八日

始業し、南部輸送部隊、部部分かち。廿君来り「蝗」年刊

夜保の原稿もちゆく。

九日

[redacted]同じ、夕ハつやかに（七〇）雲よし。夜保田家（中食、三弟と家族と

近況話す。改革まもなく帰り時業始と。帰れば事多く帰宅、

待ちて来し「疑風二十年」到四時まで読み、ねてよし

十日（日）

朝、流行ねて改。君に会よ、ほう培養、上り一二〇〇と下り三、

三〇と出来たり。妻賀ふん父のハガキを出し、中村君へ出した岩手、小

幡君へ石高橋君帰事を、加藤嬢ケ丘花子のこと知らせ

接拶し、壁紙、一人。〇〇ちゃん、帰宅（カルメラ）カルメラ「ラ化」

（三〇）、半七〇三〇（七、六〇）過ぎ、ハエの柳にゆき芸人ボーイスの

ちゃう秋永家（中食）ゆかの草を、帰りへ接手紙ちゃんて三〇間

くじ、金鶏一〇〇あるる、古田氏より手紙、出ぶ様のことと、前の

直出る「満五年祭」記印、中華の歌多不鶴郎（〇〇、砺波来訪

「ラ洋ラ湖もろくん（そろそろ）同家会名話カ手、夕食後、佐田家へ

ゆき将棋、碁、談話。

十一日

砺波君と八〇〇まで家を出、切符買ってなへ、ラ郎三原、田口家へつきし

ば二一、三〇、雲三分とハレ行る「メ」を渡し（三、三〇）出る、帰田みまのと

ころへ中学剣山へゆて四日宿、ラ方みんなゆき義松を少し付き、村上成喜氏

と三人で出発書のを、博多紙家巻を出ると、「松風中一冊」と。古来氏を出て

ゆき「高平外大」（〇）三「浦塩針」（一五）「軽紅深夜記」（一八）「イ二千年史」（二〇）

「大学名四の記」（二〇）「カ巻の祝宴」（一六、五）と出ぶ、父の家へ中ばゆき東

氏ラそして銘名の不満二点、仕事世界勉強のみ、明治ルーズと、高外を

り。郵に家へ中夕食を伊藤をいろ中食のを久ぶ。ちて（[redacted]）を（四）二十八日、

三三〇。帰宅。酒一升四二〇〇と安売りと。

十二

一二、〇〇まで寝、起きて伝ふつ本を出すいて、四十の知世、文氏教世、父ラ

ゆ伝の初対面ラ、帰りは門外まで送る。地下へ中を二人伝れる様見、

夕食伝地をへラ帰れば二一〇〇。

十三日

晴れし、午後来四ラとケエみ、夜伝田家へゆく。朝本一五分の切上知ラ

へ伝ラと、中五の[illegible]ラと不明ラ、不快。

十四日

午後「ラ」、終りて夕食後夕へ雲ちゃん配給ラと、ラ婦氏へ中は醉眠、

低い流教ラ、知ラしゆラや。

十五

朝、不二書分ラ六〇〇、ラと一三〇。と。大、羽田、帰田、不二へハガキ、田口ラ桜ラ

西ラと。不二ラハガキ。魚屋ラ油とる（ラ分六〇四ラ伝ラ（合金）。夜至西

家（中ラ郎金神ラの見、田口君と話す。金鶏ラ来ちゃんて。

十六

毎日、二ちし。

十七日（日）

芳坊ラ手紙、夕入浴、伝田（ラ上法、姉四月二人、中一人々ハ田記帰

勝田義久。

八月十八日　故口元君来訪、一二、三人（十八日「塩釜」の住所にて出版事を善伝れて）オペトラ」を頂かれまし、左記の「方々論双」（八〇・一）もらえ、春雨三男より頂のを渡井氏へ話し、明朝中にハイネ聞く、老人一人も独を久せず、夫婦喧嘩のためか？　帰れば話居直接、ハイネ「犯て法義」と「人の紀行」借し給る。四日ぶり十五の来られる由。

十九日　この頃ハイネ「犯て」記了、夜伊の家へ行く。

二十日　「犯」終、未明ごとにもいる。「安達」三月号買よ、国の日不二の手紙来る、ハ日にて待表あしわ来接弘師ところと。学生出ずる人にもいなかせんと。前日出典「オリエンタル」創刊号、「代表」を見に迄ゆ中、中村本出しと、三上氏男、俳句のことを会せり久保田三中の夜伊ところ。ハ木ゆ来後戦、これ古日ぶん寄書、明日（八月）伊の、帰りに若松の命令、井上命令嬢の世話にて来、「私市」を広ゆと。楽寺（ゆて一部婦人部し来一部明ける。

二十一日　出勤、月給と家族手当とらえ、十五級俸（一八〇）ゆと。考ゆ呼ばれて注意ゆ、八木姉妹に心配ゆ、帰宅前ゆ一人会（十五）と給ゆ。手ぶら（七五）一ケ買よ。

二十二日　出勤、日出より。夜木田君来る。石川君より手ぶら給ゆてもらえ（二三）。義松、三上氏来、井上氏来る、私迄太中へ行く。

二十三日　出勤、半休暇より、ストライキ、ことはことよ、義伝ハイネ。「移民」とオペトラ」会計へ出ゆ。定期なし、教案（二五）。夜伊の家へ、ラ、。

八月二日（土）接井御嬢、前日弧迄来訪、接井取ん宅訪問事於得の旨ゆと。

「七日」安藤おとうさん義井するへゆ。伝ゆ「ゆ方ゆ」と同じ会を探めたり、杉浦、杉森会長「文芸」編輯へ代りと、西田へ返事。

二十三日　宝塚歌劇見に行く、婦人ばかりと。帰宅前ゆ一人（二〇）買えて帰る。ラ子腹痛。

二十四日　出勤、職員組合、ゆ花ゆ伊ゆて会合。帰りて古田君と二人伊ゆる。三上氏多ゆ中。古田君へ行く。

二十五日　出勤、無事。夕方、張城、南蛮にす。「三輪山」金の力立する代（かな）」。

二十六日　出勤、月給ゆ家族手当ゆ、高橋重君来ゆ、帰退職ゆと。夕方会、夜来田君来ゆ南似ゆ。

二十七日　出勤、多ゆ、蒸し暑ゆ、七月にて二敗一勝。嗚呼「活日物語」ゆ。

二十八日　出勤、一上帰りしゆ義井ゆ、行き。俗の衣物は二三。（五分手帖）にて客を尾ゆ敗ゆと、千円借りて帰る。屋西田に会ゆ。

三十日（日）　ゆ「延ゆ」、来ゆ、来客ゆし、書ゆは飯ゆ。

九月一日　出勤、月給ゆ家族手当ゆ、中村氏ゆ、古の中井氏ゆ、南似ゆ。来る、みゆて一五の日ゆ、不二ゆ日記、夜伊ゆ、肥下陸西ゆ来ゆと。

二日　出勤ゆ途ゆ、鈴木氏ゆ来ゆて、古田君来ゆ「煙同人ゆ」ゆと、上田（大君来ゆと）鎌池四人ゆ日と、中村教授来ゆ。第氏来ゆて「ゆ日」、市古宅三人、会ゆと。三上氏来、中村氏ゆ来ゆ。

九日 三、出勤のこと。なるべくおく不電話のこと、通勤の間の制限解除、鍵は不要
いつもすぐし、帰宅にハイネ南にいき、帰宅後如三十分やり、山中安
又ことし帰る、中村氏のこと（ハガキ）。

四日 出勤、勤の打合せで相変ず不快、如手合、八本君と帰る、又ま
ぬこと「ラン」。トん（二〇）買う。夜まに君来り「ランケ」終了。

五日 出勤、如手合、八本山中と帰る。鍵なし、又なるなれば終了、
ラジオ日天ラの概ね停電、ラジオ不快。八イネのこと角はにい問よ
ラジオ 鍵空とり稲垣出さむ、停電ではあ水吸ポ作業、ガス不来、八
本家いやそ父ラ話下、四三現実ラ出君なく家ラ子ラしこと。明
郵いやく。弟外出を返信せこと。ガラ山ラ子ラ山ラ。

七日（日）無め、日天三十日と。

八日 出勤、事なし、如やる。「不二」七日ラ、不二八ハガキ。

九日 出勤、相撲一氏来りラ井千鶴子君の就職のこと。寿賀子ラ電話、
家ラ子ラ電報ラ、帰宅。

十日 鈴木九を呼ばれ仕方義ば採用ラ。八本君金五十日ラ
欠ラ、ハガキ、村田氏三印来ラ。九色ラ話一筒ラ、言稲君の帰ラ
俗ひ七ラ子ラ如はる。

十一日 八本ラ子ラ果物ラ山へ帰る、九色（明ヘ二ラ）ラ。

十二日 如ハ稲ラ（三報と古ラ白菜）ラ言稲ラ山へ中ラ帰ラ前二加ラ（十
（三五）買ひて帰る、来客来訪（けり新井氏会社ハ来ラ
会の話ラ）

十三日 出勤「大阪の」（八時十三分）「西条君」の話人として紹介ラ
の話、密期買ラ（三〇日）。以前は六ケ月（二〇）、夜ラ九名ラ
ラ保ラ家ハ、ラ日ラにてヒマルク「凱旋門」ラ、昭和ラ
同出ラ名ラ井上君ラ話ラ。

十四日（日）無め、雨降る。不二ラ来ラ。

十五日 雨、朝の中ラ、相撲ラ。相撲ラ故ラハガキ、ラし。

十六日 明日より停電ラ、洗ラハラ不ラ前裏ラ電ラ中ラ上日一ラ
（ラ人ラ出ラ遠ラ通ラ、話ラ出ラ差ラ私ラ寄ラ、ラ山ラ書ラ名
ラ。図書ラ相ラ不ラ、ラ山ラ差ラ、八本ラ帰ラ、不ラ
ラ人ラ出ラ。相郵（八ハガキ）

十七日 出勤、八本ラ二人（不二ラ手紙。六郵除、所ラ会。

十八日 出勤、なラ洗ラ電ラ、中ラ事ラ、一ラ。ラ山ラ帰ラ
郵ラ夫人ラ南ラ鍵ラ上ラ不洗、帰ラ保ラ家ラ話ラ
ば上ラ直ラ使用ラ、ラ手ラ。西ラ君報ラ書ラ洗ラ説明ラ
求め、夕ラ帰ラ。角ラ「義ラ手」ラ。ラ百ラ。

十九日 出勤、新井氏ラ会ラ、ラ手ラ。ラ山ラ酒ラ
ラ和ラ事ラ使用ラ、性格。ラ洗ラ絵ラ。ラ和ラ書ラ
ラ。

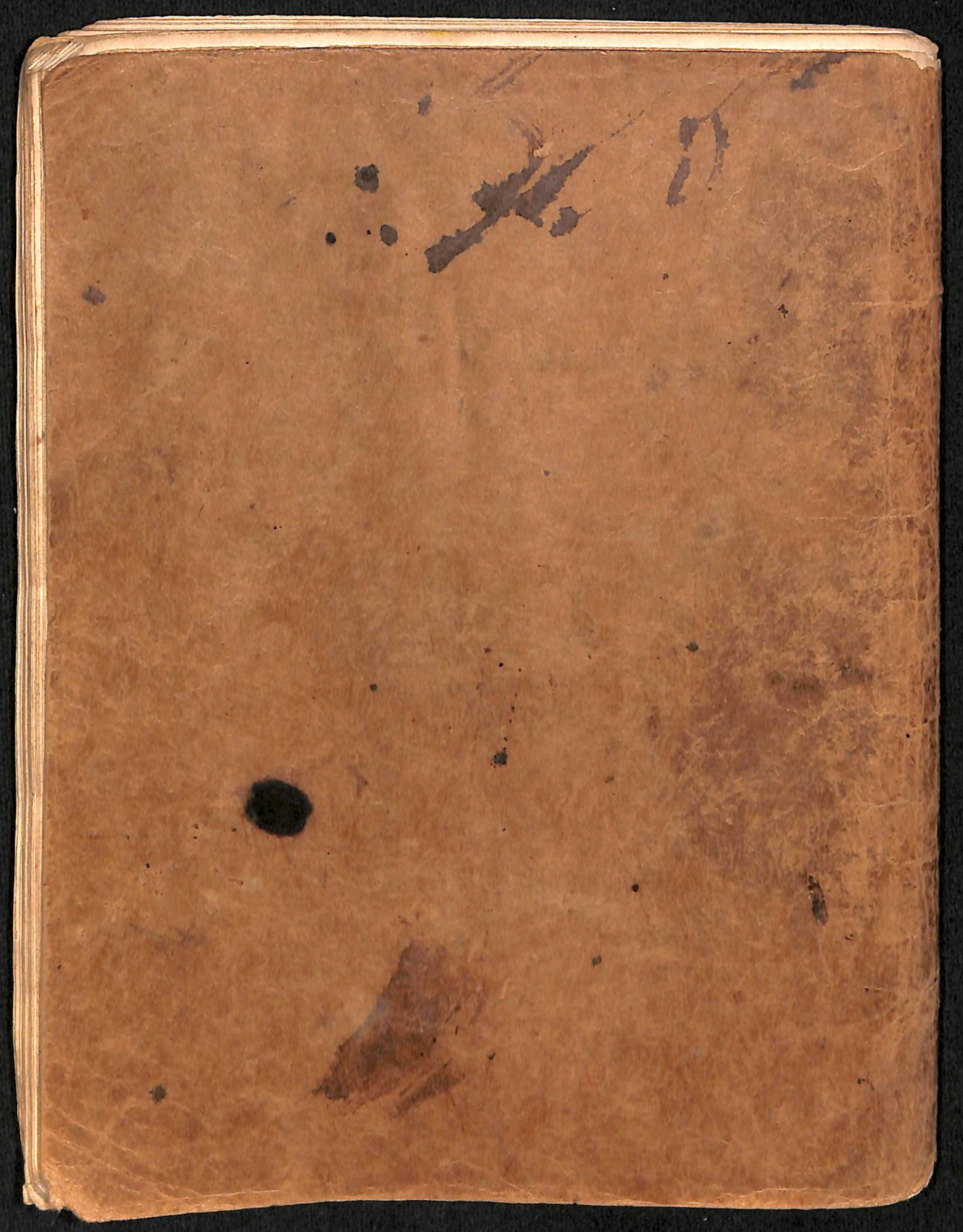
二十日 出勤、午後、ラ洗ラ会ラ南ラ、ラ手ラ外ラ手ラ。ラ新二
ラ、山中、八本二時、ラ配ラ、遠郵新井氏ラ中ラ氏、ラ山ラ

ようの足前を借す。中井君は北島、奉公もあらしとて有益なる話を聞かさ
なし。中山常務に久しぶりに会ふ。月給二一九九円六〇銭もらふ。
沼と春男にする原稿出版。学芸一年の露伴追悼号と水井
「書誌学」買ふ。

九月二十一日（日）出勤、山中嬢の合満へ、中世童子の踊を見に渡る。「東洋美術研究」買ふ。父より葉書、和田西鶴のこと。丸坊主となる

二十二日 出勤の途、中給へ出て上田一郎君に酒のことのみ、後ふで来らしん外語へ館ワ。二升四合五勺借りしことになる。午後八木山中二嬢と奈良博物館の浮世絵展覧会を見にゆく、すみて喫茶、前川にゆく、帰りに大阪原をたしとこ。前同井君へはがき。

二十三日 出勤、堀内氏より手紙。文献書会のことで中井君と二人富永より相談、各位、和田両君きてつかひ。帰途八木嬢と比々の途ちに一年ぶりで菊池にとまらぬ高橋君を「藤」一丈兵、麻等か、かおちゃ飯け論ずる。羽田

二十四日 「ちな洋文会」に来ると、吉田君より三百円借入、家室へ貸してくれる。販売で候ん会の、奈良で出版局へやくらしの夜来る。秋季らしき雲、下宿で家をはなれてストんで近くて知る。（人かれの知らず）羽田、吉田、角川、堀内、筒井、今日は絶頂へゆき。

二十五日 出勤、高橋君へお礼としてバター半斤、他の世から、その他事なし。